

---

for You to You

あららぎ慎駒

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

f o r   Y o u   t o   Y o u

### 【Nコード】

N 7 7 2 5 B

### 【作者名】

あららぎ慎駒

### 【あらすじ】

大学に入学して早々、広い校内で迷子になってしまった古谷鈴音は、そのとき助けてくれた矢崎先生に一目惚れしてしまう。矢崎の不思議な魅力に思いを募らせる古谷。この恋は叶うの？

## 1話：始まりの日

大学に入って初めての講義。緊張はすでに恐怖に変わりつつありました。あまりにも広すぎる建物の中で、入学早々、私は見事に迷子になってしまったのです。

学内はどこも比較的新しそうな真っ白な壁で、ロビーなどには観葉植物なども配置され明るい雰囲気なのですが、私にとっては巨大迷路そのものです。教科書を抱え持つ手は今にも震えだしそうなほど。今の私は、デパートで迷子になった子供と同じ状態なのです。何人かの人とすれ違いましたが、講義室の場所を聞くにも聞けず、結局この有り様。さすがに泣き出すことはないと思いますが……。

人気がなくなっただけでもありませんが、講義開始直前となった今、すれ違う人もあわててそれぞれの部屋に駆けこんでいく人ばかりです。新学期早々遅刻をしてはならない、という気持ちは同じのはずですが迷子は私だけ。この人たちについて走っていけば何とかなるかとも思いましたが、優柔不断で動けないのが私のようにです。

この講義の先生がすごく怖い人で、早々に目をつけられたとしたら……。不安になればなるほど、人はマイナス思考になるものです。負の加速度を持つ私の頭が最悪の状態を思い浮かべた瞬間、突然に最高のチャンスはやってきました。とても優しそうな男の人と目が合ったのです。無意識に、私は声をかけました。

「すみません、」

しかし、その言葉の続きは出てきませんでした。黒いさらっとした髪と、日焼けしたことがないような白い顔、うらやましいほど整った容姿。男の人としては華奢な感じもしましたが、背も高く……結局のところ、私はその人に一目惚れしてしまっただけです。眼鏡の奥の瞳と目があつた瞬間、ただ講義室の場所を聞きたかっただけなのに、恋の告白をするような緊張に変わってしまったのです。頬が熱くなるのをはつきりと感じながらもどうすることもできず、そ

の緊張に耐えました。さつきまでとは別の気持ちで、涙が出そうになりました。

私が固まってしまおうとその人は不思議そうにしましたが、ある一点に目がいくと、ほほえみながら追い打ちをかけるように一言。

「その教科書……僕の講義ですね。」

「えっ？」

目を大きくして、私は再度固まりました。

不意打ちを食らい、あわてて思考回路を働かすとネームカードに気がつきました。矢崎孝輔、助教たけもと じゅすけ……。その時初めて先生だと理解しました。大学の先生というのは大学に入ったばかりの私からすれば年もかなり上ですし、研究者でもあります。大物俳優にはそれなりの雰囲気があるのと同じように、研究者にも、違う世界を思わせるような雰囲気があるものだ、と私の中では決まっていたのです。それに加えこの外見。どこをどう見ても、先生とは思えなかったのです。声をかけたときは本気で学生だと思っていたのですから。

「ちようどよかった。講義で配布する資料が多くて困ってたんです。手伝っていただけませんか？」

優しいな雰囲気とは裏腹に、有無を言わず教官室に連れてこられ、気がつけば大量のプリントが入った段ボールを講義室まで運ばされていました。その間、私がどれだけ方向音痴かと思いきや知らされませんが、好きな人と少しでも一緒にいられたらいい、などという感覚でいたのも事実です。そこに大きな間違いがあることも知らずに。

資料を教卓の横に置いて、出入り口の一番近い席に着き講義を受けました。最初にあの大量のプリントを配布した後、先生の自己紹介や講義の説明などが数分。講義に入ったと思ったらあまり難しい内容もなく、一応聞いてノートはとっておく、という感じで私の視線はずっと先生に集中していました。それに全く気づく様子もなく先生は講義を進めています。周りを見渡せば、何人かの学生はすでに眠っていました。眠っていなくても講義を聴いていない学生が大半といった感じでした。いちいち気にしていたら時間の無駄、そん

な考えが先生の頭の中にあるような気がしました。そして私もその中の一人だと思ったのです。

今の先生の目はとても冷たいと感じました。さっき見た優しいような雰囲気は、どこにも感じられないのです。先生から見れば私は特別でも何でもなく、講義を受けている学生の一人です。私を意識しないのは当たり前前のことですが、今の先生は学生すらも意識していないように感じました。ただ淡々とホワイトボードに文字を埋め、説明を続け、講義を進行させる。説明もわかりやすく、内容も興味は持てる。それでも一方的と呼べる講義が100分続いたのです。

初めての講義が終わりほっとした瞬間、退室しようとした先生が私に声をかけてくれました。

「お疲れ様。おかげで助かりましたよ。そういえば、名前、聞いてませんでしたね。」

「古谷鈴音こたにすずねです。」

「古谷さん、ね。そんな難しい授業でもないと思いますけど、質問とかあったらいつでも聞きに来てかまいませんから。」

「ありがとうございます。」

「じゃあ、次の授業もがんばって。」

そう言って部屋を出て行く先生は、初めて見たときと同じ優しい雰囲気でした。講義中の様子が嘘だったかのような自然な笑顔。

でも、今の私にはその訳はどうでもいいのです。先生が話しかけてくれたこと、私の名前を覚えてくれたこと、笑顔を見せてくれたこと、それらが重要なのですから。

私の大学生活は始まったばかりです。

## 2話：人間関係

古谷鈴音、大学一年生、自称恋する乙女です。

とはいっても、今現在片思い中ですが……。その相手はすぐそのデスクで難しそうな専門書を読んでいる先生、矢崎考輔さんです。

先生は化学で有名なこの大学の卒業生で、私の大先輩でもありません。卒業後は大学院に進学し、そのときの研究で注目され、先生として大学に戻ってきてからその期待は変わらないようです。事実、先生の研究室に入る人達はほとんどが成績優秀で、研究者や専門家として生きていくために、大学院への進学を考えている人達なのです。

今年研究室に入ったのは3人。3年生で卒研見習の西田先輩にしだと井上先輩いの上。それと4年生の中島先輩なかしまです。3人ともやっぱり成績優秀で、進学希望のようです。私は毎日のように研究室に来てはいますが、卒研生ではありませんし、この研究室に入れるほど頭も良くありません。午後は選択科目がメインになっているので、あまり授業をとっていない私は時間が空いています。その時間を利用して、先生に会いたいのがここにこへ通っているようなものです。最初の頃は先生の授業はもちろん、その他の授業も説明がわかりやすい事を理由に質問に来ていました。それでも邪険に扱わないのが先生の優しさ、なんて思ったり。出会った時もそうでしたが、最近、今のようにレポート提出のチェックや小テストの採点などを手伝ったりもしています。先生にとって私はお手伝いさんの採点のようです。「やつほー、ざきっちー！お？古谷ちゃんも来てたんだ？早いねえ。」

「中島先輩！こんにちは。」

「ご機嫌ですね？何かいいことでもありましたか？」

「さすが、ざきっちー！じつはさ」

研究室に勢いよく飛び込んできたのは、4年生の中島先輩。スポーツマンで、夏が似合う感じの男の人です。去年から卒研見習いとしてこの研究室に入っていて、先生とも友達みたいな付き合いのようです。友達にはニックネームをつけるのが中島先輩流の礼儀らしく、先生のことをざきつちと呼んでいます。まだ私や3年生の先輩達にはニックネームがついていませんが、考え中との噂も……。変なのにならないことを願います。

「先生、レポートのチェック終わりましたよ。」

「ありがとうございます。全部出てました?」

「中島先輩のがありませんでした。」

「あ、あー……環境化学の?今から書いて出すから見逃してくれないかなあ?」

「提出期限は絶対です。提出日、5日前ですよね?マイナス5点。」

「鬼だー、悪魔だー!」

「恋にうつつを抜かしているから痛い目見るんですよ。」

しっかりとそう以案外いい加減なところがある中島先輩を指導しているんだと先生は言いますが、半分はいじめて楽しんでいるのだと私は思います。実際に中島先輩はリアクションがおもしろいので、友達にもよく遊ばれるのだとか。でも、先生がそういうやりとりをするのは中島先輩だけのようで、仲がいい証拠だとも思っています。別に先輩に嫉妬をするわけではありませんが、羨ましい気持ちはあるにはあります。私が卒研生になる頃には、先生と仲良くないれているといいんですが……。

「古谷ちゃん、今日はまだ3年来てない?」

「来てませんよ。」

「おっそいなー。もちろん、古谷ちゃんは来るよな?焼き肉。」

「は?」

何の話ですか……?」

「聞いてなかったんかい!?研究室のメンバーで親睦を深めるために焼き肉パーティでもしようじゃないかって話。せつかくだから古

谷ちゃんも一緒にさ。みんなの予定が合えば今日の夜でいいっしょ？」

「はあ、私はいつでもいいですけど。」

「よし、決定！女の子が大丈夫なら男子は全員O・Kだな。」

その基準、よくわかりませんが……。でも、こういうところが中島先輩らしさというか何というか。思い立ったが吉日、と言言葉があります……。毎日が吉日のような人です。

「先生も行くんですか？」

「ええ、もちろん。」

最近知ったことですが、先生はクールに見えますが、けっこう遊び心がある人のようです。よく中島先輩と飲みに行ったりするそうで、こういうイベントも大好きらしいです。

中島先輩がノリノリで今日の計画を話していると、ゆっくりとドアが開き、西田先輩と井上先輩が入ってきました。

「こんにちは」

「井上！焼き肉好きか？」

「は？好きですけど……？」

「じゃあ、決定！」

「西田！今日予定空いてるか？」

「特にありませんけど。」

「じゃあ、西田も決定。今日の5時半、みんなで焼き肉！！」

「ちよつと待つてくださいよ、先輩！俺、今日提出の課題があるんですけど。」

「そんなの関係ない。」

むしろ自分の課題も大丈夫なんですか？そんな気持ちも込めて先輩に指摘を。

「おかしくないですか？中島先輩。井上先輩の予定聞かずに決定なんて。課題が先に決まってるじゃないですか。」

「古谷さんの言うとおりです。学生は学業が優先ですよ。」

先生のその言葉に中島先輩はつまらなさそうな顔をしましたが、

すぐに楽しそうな顔に戻って一言。

「じゃあ、課題手伝ってやるよ。」

「ありがとうございます。」

井上先輩も手伝ってもらえることがうれしいのか、笑顔でお礼を言って、2人で図書館に向かっていきました。

嵐の後って、まさにこういう状態でしょうか？研究室がとっても落ち着いた場所に感じました。

井上先輩は中島先輩になついで、と言うより中島先輩のおもちやといった感じで、仲良くやっています。でも、西田先輩はすごくまじめなひとで、中島先輩の賑やかさが苦手なようです。現に焼き肉の意味もわかっていなかったようで、先生に内容を聞いてため息をつけていました。

なんだかとっても不安なんですけど、大丈夫なんでしょうか？

井上先輩の課題に予想以上の時間がかかり、6時過ぎに焼き肉パーティーは幕を開けました。

課題の手伝いでバテたかと思いきや中島先輩の勢いは止まらず、行きつけの焼き肉屋まで自転車で走ってきました。私たちが先生の車で走るのを追いかけるように……。それでもまだまだ疲れを知らない中島先輩の勢いは加速し続けているようです。すぐにお酒を注文して、最初のお肉が運ばれてきたと思ったら、全部を豪快に網の上にのせ焼きだしました。焼き肉と言うより、炒め物という状態です。

「よし、焼けた！みんな食べていいぞー！！」

「まだ赤くないですか？」

「牛だから食べる！」

先生の忠告も聞かず、中島先輩はとっても楽しそうです。でも、楽しそうなのは井上先輩も一緒のようで……。半生のお肉に目を輝かせる姿は、うり二つです。普段はしっかり者な井上先輩のイメー

ジが私の中で音を立てて崩れていきます。

その横で西田先輩は2人を無視するように、ゆっくりと箸を進めています。こんなんで本当にいいんでしょうか？

「中島はいつもこんなのですから、ほつといていいですよ。」

先生は素晴らしいながら、ちゃんと焼けたお肉を取り皿にとって差し出してくれました。私は顔が赤くなつた気がしましたが、暑さのせいにして、そのお肉を口に運びました。

「矢崎先生はとても有名な方で、研究も立派なのに、なんでこんな人ばかり集まるんですか？」

突然、西田先輩が先生に話しかけました。もちろん、中島先輩と井上先輩は食べることに夢中で聞いていません。

「なんででしょうね。でも、いつも真面目にしているのは無理ですから、こうやって羽目を外せることも大切だと思いますよ。」

「そうですね？これは悪ふざけにしか見えませんが。」

「こういう性分なんですよ、彼らは。」

「僕にはわかりません。」

「これを機に、視野を広げてみてはどうですか？」

「……。」

先生の言葉は、いつもより鋭く感じました。

「一般を心得た上で、例外を知ること大切なことですよ。特に化学は例外が多くて困ります。」

先生は笑顔でした。

焼き肉パーティが終わり、私は先生の車で送ってもらうことになりました。中島先輩は大満足の様子でまた自転車を走らせ、西田先輩と井上先輩は近くの駅まで歩いていったようです。つまり、今、私は先生と二人つきりになったわけです。

なんだか気まずい感じがして、あまり話すことも思いつきませんでした。頭は一生懸命働いていました。そして、単純な質問を一

つ。

「なんで先生は、化学を勉強しようと思ったんですか？」

「僕たちは、自然の上に生きています。化学も自然の物を元に成り立っているはずなのに、そこから生まれた物たちは不自然です。それらを否定するつもりはありませんが、誰でも自然の風景を美しいと思うでしょう？それを少しでも守りたいと思ったんです。それが僕の夢でもあるんでしょうね。今は環境を考えた研究、開発に力を入れていますから、興味を持ったんです。」

その連なる言葉以上に難しい話のような気がしました。それと同じに、先生が遠く感じました。何となくここにいる私とは違うのだと。

「すごいですね。」

「なんにもすごいことなんかありませんよ。思うことは簡単です。それを実行するのが難しいんです。夢に向かう子供と一緒にですよ。」

そう話す先生は楽しそうな笑顔を浮かべていました。子供のようにな純粋なそれでした。

そんな話をしているうちに、もうアパートの近くまで来ていました。

「先生、ここでいいですから、ありがとうございました。」

「気をつけて。おやすみなさい。」

「おやすみなさい。」

車から降りた私は、それが見えなくなるまで、ずっと見送っていました。

車が視界から消えて、頭の中にしっかりと残った単語。

「夢、か。」

今は、先生と一緒にいることしか考えられませんでした。

### 3話：見たもの 見るもの

焼肉パーティーから数日後、西田先輩は研究室に来なくなっていました。学校には来ているようなのですが、学内でも一度も会っていません。気になった私はそのことを先生に聞いてみましたが、授業も普通に受けていると言われただけでした。

放課後、今日はだろうと思いつながら研究室に向かういつもの廊下を歩いていると、こちらに向かってくる西田先輩の姿が見えたので、私から声をかけました。

「先輩、お久しぶりです。最近見なかったんで心配してたんですよ。」

いつものように声をかけた私に返ってきたのは、いつもと違う反応でした。普段は感情を顔に出さない西田先輩ですが、その瞬間、明らかに不機嫌ととれる表情をしたのです。

「聞いてない？研究室かわったから。」

「え？」

「嫌なんだよ、ああいうふざけたの。矢崎先生も真面目な方だと思つたのに、やる気無さそうだし。正直がっかり。それだけ。」

返す言葉が見つかりませんでした。西田先輩の言うことに納得したわけではありません。ですが、私の胸の奥につつかえている何か、頭の動きを邪魔しているように感じました。西田先輩の見下すような冷めた視線が妙に怖く感じ、私は耐えきれずに、うつむき、唇をかみしめました。

そんな私を無視するように、西田先輩は、またゆっくりと歩き出しました。後方からはその足音が、一歩、また一歩とはっきり響いてきました。

「先生の事、悪く言わないで下さい。」

私は振り返り、不意にそんな言葉を発していました。

西田先輩の反応は全くなく、その姿はどんどん小さくなっていき

ました。

わからないことだらけでした。

西田先輩の考えていたこと、いること。

私の中でつかえている何か。

静かな廊下の真ん中で、一人取り残されたかのような寂しい感覚だけが堂々と存在していました。

研究室に入ると、いつものようにデスクに向かう先生と課題をこなしている中島先輩がいました。先生とさっきの話をしたかったのですが、今は無理だと思い、できる限り普段通りに振る舞うようにしました。考え事や悩みがある時の私は、それがすぐ顔に出るのでそれによって気づかれたくないと思ったのです。

「こんにちは。」

「こんにちは、リンちゃん。どした？なんか元気ないぞ？」

焼き肉パーティーの後、私にもニックネームがついて、リンちゃんと呼ばれるようになりました。私の名前が鈴音なので、鈴の音からリンになったそうです。

それにしても中島先輩は鋭い。

「そうですか？いつも通りですよ。」

気持ちを落ち着かせながら答えました。

「ならいいけど。あんまり無理しちゃ駄目だよ。ストレスとか睡眠不足は肌にも悪いから。」

そういうながら笑う中島先輩は、さっきまでの不快感を忘れさせてくれるほど楽しそうな雰囲気でした。いつも暖かい、すべてを肯定的に見つめるかのような中島先輩の瞳は、誰もを安心させるような力があるように感じました。それは先生の優しい瞳とは少し違います。私にとってとても心地よいものに代わりありません。

「こんにちは。」

「うり坊！遅い！待ってたぞ！！」

「え！？あー、すみません……。」

井上先輩が入ってきたと思つたら、余計元気になつた中島先輩がその腕をつかんで研究室の外に引つ張り出そうとして……、

「え？ちよ、ちよつとなんですか？」

「今日は新作ゲームの発売日！行くぞ、うり坊！！」

「は？何で俺まで！？」

「金、貸して？」

「……」

結局井上先輩は中島先輩に強制的に連れて出されてしまいました。あの二人がいるとすごく騒がしい研究室も、いなくなつた途端にいろんな性格だから、と言つてうり坊と名付けましたが、どちらかと言うと中島先輩の方がその言葉に合っているような気がして仕方ありません。まあ、今はそんな先輩のおかげで先生と2人きりになれたわけですが……。

こういうときは意識すればするほど気まづくなつてしまつて、まともに話ができないものです。私はどうしていいかわからずに距離を置いたまま、先生を見つめていました。窓から注がれる一筋の午後の光が、ちよつとペンを走らせる先生の手を照らしていました。そのなめらかな動きに見とれていると、急に先生はこちらを振り返りました。

目が合つたのは、鋭く冷たい目。

しかしそれはほんの一瞬。

「あれ？古谷さん、来てたんですか？」

先生が声を発したときはもう、いつもの優しい目でした。

「こんにちは。気づいてなかつたんですか？」

「すみません。集中していると、どうも周りが見えないもので。」

「その集中力羨ましいですよ。」

心臓がいつもより素早く運動するのを感じながら、頭の中では冷静さを意識し、先生に笑顔を返しました。

続けて世間話などをしながら、先生は作業していたものを片付けだし、私はいつ話を切り出そうか考えていました。

会話が一度途切れたところで、私は頭の中を整理して、重たい口を動かしました。

「先生、さつき西田先輩に会ったんですけど……研究室かわってたんですね。」

「そうみたいです。」

先生の返事はとても簡単でした。

「先輩と何も話さなかったんですか？」

「ええ、事務的な文書が届いただけですから。」

「その後も、何も？」

「はい。」

予想外でした。先生は西田先輩と一度くらい、少なくとも連絡程度の話はしているものだと思っていました。そのくらいの話はする人だと思っていました。

「彼と話しをすることに何の意味がありますか？」

私の意中を見抜いたように、鋭い言葉が向けられました。先生の雰囲気も、いつもよりよっぽど堅いものでした。あの時の不快感に似た何かが、また私の脳の働きを邪魔しました。

「気にいらなかったんでしょう？ 研究室の雰囲気とか、人間関係とか。僕は彼に視野を広げなさいと言いました。でもその気はなかったようですし。」

「止めようとは思わなかったんですか？」

「止めることに意味は有りません。別にこの研究室に彼が必要なわけでもありませんし、それは彼にとっても同じ事ですよ。」

先生の言うことは、実際、間違っではないとは思いますが、何かが腑に落ちないのです。胸の奥でもやもやしたものがいつそう大きくなって、不安な気持ちがあらわになってきました。きつとそれは顔に出ていたでしょう。泣きたいような苦しい感じがありました。

また私は言葉に詰まり下を向きました。

「誰でも合うあわないはありませんよ。水と油です。無理矢理一緒にしてもすぐにまた分かれてしまうでしょうね。でも、つながりはあります。境界があるということは隣り合っている、ということですよ。今はそれで十分だと思います。」

不意に先生の言葉が降ってきました。それはさっきまでと違う、包むようなよりいつそう優しい声でした。

なんだか急に気持ちがすっきりして、肩の力が抜けました。安心感、それに近い気がしました。

顔を上げると、いつもの笑顔がそこにはありません。

「先生、私も視野を広げて、成長しないとイケませんね。」

「もちろんです。日々、勉強ですよ。」

「ただいま帰りましたーっ!!」

「中島先輩!？」

ほほえむ先生の優しい瞳が驚きのそれに変わると同時に、勢いよく入ってきた中島先輩と井上先輩。さっきまでの雰囲気は嘘のように急に騒がしくなっていました。

「ちょっと、中島先輩!人のお金使ったうえ、課題さぼってゲームなんてしていいと思ってるんですか!？」

「いいのいいの、学生のうちしかやりたいことやれないんだから。心配しなくても終わったらうり坊にも貸してやるから。」

「その前にお金返してください!」

小学生か、良くても中学生レベルの言い争いで盛り上がる2人。これで本当にトップレベルの学生なのだから驚きです。

「先生?これも社会勉強でしょうか?」

「反面教師、ですね。」

言いながら先生も私も笑い出しました。

先生と二人きりの時間が終わってしまったのは残念ですが、やっぱりこの研究室は騒がしいくらいがちょうどいいようです。

#### 4話：私の思い

先生、もしも私が告白したら、先生の事が好きだと言ったら、どうしますか？

真剣に聞いてくれますか？

いつもの笑顔でごまかしますか？

そんなもの本気じゃないと言いますか？

わかっていきます。先生にその気が無いことくらい。私はただのお手伝いで、私が勝手に研究室にいるだけで、特別でもなんでもないこと。

先生に会えるだけでも嬉しくて、話すときごく楽しくて、そばにいられるだけで幸せで、それなのに……。それだけで十分だと思っていたのに……。誰もいない部屋に明かりを照らすとき、不意に込み上げる寂しさ。日々、波のように繰り返す、喜びと悲しみ。

もうどうしていいかわからなくて、何もできなくて。

先生のせいでもなく、誰のせいでもなく、全部、全部自分のせいなのに。

どれだけ泣いても、我慢しても、何も変わらないのに。わかってるのにそれしかできなくて。

臆病な自分が悲しい。

だけど、そんな悲しさ寂しさ、全部忘れさせてくれるのは、やっぱり先生なんですな。

なんかもう、わけわかんないよ。

全部終わらせてしまいたい。

だからせめて、この思いだけ、たった数秒の言葉だけ、告げさせてください。

「先生、好きです。あなたの事が、好きです。」

目が覚めると、飽きるほど目にした白い天井が視界に入りました。窓の外からは朝日が差し込んで、小鳥の鳴き声が聞こえて……いつもとかわらない朝。何一つかわらない、かわらない。それは私にとって無言のメッセージでした。

## 5話：知りたい

太陽が真上に昇り影が小さくなるお昼間。私は久しぶりに学食の長い列に並んでいました。普段はお弁当を作ったり、コンビニでパンなどを買って食べているのですが、今日は寝坊してしまったので、この列に参加しなければならなかったのです。

布団に入る時間は今までと変わりないのですが、それからなかなか眠りにつけず、結果、寝坊することが多くなっています。原因ははっきりしていませんが、今の私にはどうも出来ない気がして、むしろ、その勇気がなくて何も出来ないでいます。昨日の夜のように、先生のことがかりが頭に浮かび、ただ自分の不甲斐なさに涙して、泣き疲れて眠る日も少なくありません。

そんな事を考えていると、また悲しくなってきました。そんな事を考えても意味はないのに……。悪循環とはこの事だと思いました。その間も列は順調に流れ、学食で人気のカレーライスの匂いが近づいてきました。もちろん私もこれのために並んでいます。

やっとの思いで列の先頭になり、お目当てのカレーライスを受け取り席を探します。久々に見る学食は校内同様、明るい雰囲気でも賑わっています。一通り見回してみても、予想以上に人が多く特に知った顔も見つからなかったので空いているテーブル席に適当に座りました。

私が半分ほど食べ終わった頃には、広い学食もほぼ満席になっていました。

「隣、いいですか？」

女の人の声で相席を求められ、私は「どうぞ」といいながら顔を上げました。

「あれ？古谷じゃん。久しぶりー！！」

「春恵先輩！？」

同じカレーライスを手に隣に座った春恵先輩。とても明るく元気

な人です。同じ高校出身の2つ上の先輩でよくお世話になっていましたが、先輩が卒業してからは一度も会っていませんでした。大学まで同じだとは知らなかったので、こんなところで会うなんてびっくりです。

「元気そうだね。どう？もう2ヶ月くらいたつけど、授業とかついていける？」

「今のところはなんとか。」

「まあ、そうだろうねえ。矢崎の研究室にいるんだって？古谷も頑張るねー。」

「へ？」

私の口からマヌケな声もれました。

「あー、中島君に聞いたの。いるでしょ？4年の。」

「いますけど……中島先輩と知り合いなんですか？」

私が問いかけると、なぜか春恵先輩も疑問があるような顔をしてスプーンをくわえたままじっとこちらを見ってきます。私、変な質問しましたか？

「あれ？知らない？あたし、中島君とつきあってんの。」

「知りません。」

「そうだったの？てつきりみんな知ってるものかと思ってた。」

「みんな？」

「うり坊も矢崎も知ってるよ。なんで古谷だけ知らないかなあ？」

「中島先輩、2人とも仲良いですからね。」

「古谷は仲悪いの？」

「悪くはないですけど……」

「ないけど、なに？リンちゃん、俺のこと嫌い？」

「へ？」

噂をすれば何とやら……。中島先輩がタイミング良く現れて話に参加しつつ、春恵先輩の前に座ります。しかし、春恵先輩がいきなり中島先輩をスプーンで指し、中島先輩がびっくりして固まった瞬間に勢いよく新たな話を始めました。

「やっと来た。言いたいことがあったの！今日うり坊から中島君の代わりにお金請求されたんだけど。なんかゲームのお金とか言ってた。ちゃんと借りたお金は返しなさいよ！。しょうがないから払ったといたけど。ちゃんとあたしに返してよ！」

「え、あー……忘れてました。」

「しつかりしてよ！」

中島先輩が4年生で、春恵先輩が3年生で……中島先輩の方が年上のはずなのに、春恵先輩にお説教をされる姿は、お母さんに怒られる小学生に見えてしまいます。でも、中島先輩にはこのくらいビシツと言う人がいないと駄目な気がします。やるときはやる人なんですけどね。

2人の会話はその後も続き、私は完全に視界から消えてしまったようです。空いたお皿を手に、音を立てないようにゆっくりと席を立ち、その場を離れました。その間も2人は全く気づくことなく会話は続きます。本当に仲が良いんだと思いました。ちょっと羨ましくも感じます。

午後の授業が始まるまでまだ時間があるので、図書館に行くことにしました。真面目に勉強をするつもりなんて一つもありません。なんとなく雑誌を読みたいだけです。

図書館に行くと井上先輩が雑誌コーナーの前に立っていたので、特に読みたい雑誌があるわけでもない私は先輩に声をかけてみました。

「井上先輩、こんにちは。なんか難しそうなの読んでますねー。」  
のぞき込むと、それは雑誌とは思えないほど文字が詰まった白黒のページでした。

「びっくりしたー。リンちゃんか。これね、化学の専門雑誌なんだけど矢崎先生の記事が載ってんの。」

「先生の？」

驚いて再度のぞき込みましたが、あまりの文字の量にいくら先生の記事であつても読む気にはなれませんでした。私なんか読んでもわかりそうもない専門的な内容だと察したのもあります。

「読んでみたものあんまりわかんないんだよね。先生に直接聞いた方が早かったかも。」

「矢崎先生つてそんなにすごい人だったんですね。」

「企業の研究開発にも参加してるらしいよ。よく学会の発表や講演会なんかにも出てるらしいし。研究生は長期休みにそういうのについて行けるみたい。」

「へえ。いろいろあるんですね。」

「ちよつとあこがれでもあるかなあ。まだまだ道は遠いけど。じゃあ、そろそろ次の授業行くね。また放課後に！」

図書館内にしては大きな声を出して手を振った井上先輩は軽い足取りで去っていきました。

結局何も読まないまま、私も図書館から出て授業に向かいました。

午後の授業は私の嫌いな数学です。チャイムが鳴る直前になつて講義室に入ったため空いている席は最前列のみ。仕方なくそこに座つて教科書を広げました。

いつも数学の先生はチャイムと同時に授業を開始するのですが、今日はどういう訳かなかなか来ません。このまま授業が無くなつてしまえばいいのに、と思いましたが、そうはいきませんでした。

ドアのガラスに人影が映り、ゆっくりとそれは開きました。

しかし、そこに現れたのは数学の先生ではなく矢崎先生でした。

「数学の岡野先生は体調をくずされて、今日は休みだそうです。岡野先生から伝言がありますので、伝えますね。」

そういつて顔を上げた先生と、目が合いました。

「古谷さん、ちよつと教科書見せてもらえますか？」

「はい。」

教科書を先生の方に向けて差し出します。

「教科書73ページを開いてください。練習問題3、5、6を解いてレポートとして来週の授業で提出、です。以上、これで授業終わります。」

「え?」

後ろからは喜びの音が聞こえ、講義室をいち早く出ようと支度をする音が響きます。

「先生、いくら代講でもこんなので良いんですか?」

すると先生は一枚の紙切れを教科書と一緒に差し出しました。

見ると岡野先生の字で、課題を伝えたら学生を帰しても良い、などと書かれていました。

「本人が良いってしてるんだから良いんでしょう?それに、数学のわからない僕が一时间いたところで何の意味も無いじゃないですか。意欲のある学生は見張りがいなくてもやるべき事くらいきちんとなします。やらなかった者は自業自得。」

「私は後者ですね。」

そういうと先生は否定せずに笑っていました。私が真面目な学生でないことは十分承知しているようです。

「ところで、この後も授業ありますか?」

「いいえ。」

「じゃあ、少し手伝ってもらえませんか?明日の学生実験の試料を準備しておきたいんです。」

実験の手伝いをするのはこれが初めてでした。1年生のうちには実験をすることはほとんど無いので手伝えるほどの知識もありませんが、先生の手伝いなら喜んでやりたいと思いました。でも、今日はそれだけではありませんでした。図書館で井上先輩に教えてもらった先生の記事。私はまだ、何も先生のことを知らないと思ったのです。いろいろな表情を知っても、いつも見ている、先生の一番好きなもの何一つ理解していない。そう思ったのです。先生の研究ではなく学生実験の手伝いですが、それでも、少しだけいいから

先生の夢の部分にふれてみたいと思いました。

## 6話：挑戦

静かな実験室で一人、慣れない実験器具を前にして私は作業をしていました。中学校や高校の理科室のように人体模型やホルマリンに入れられた標本という不気味なものはありませんが、誰もいない実験室は、音もなく静かでした。代わりに、薬品の混ざり合ったような独特のおいがし、あまり気分の良いものではありませんでした。

私の前には、先生の、お世辞にもきれいと言えない字で書かれたメモが一枚だけ残されていました。当の本人は、研究室でレポートや試験の採点をしたり、学会の資料をまとめているようです。経験のない私にとっては、粉末を天秤ではかり取り、水に溶かすだけでもかなりの神経を使う作業です。これが失敗してしまえば、学生実験もすべて失敗してしまうわけで、プレッシャーも緊張もはかりられません。

今更ですが、なぜこんな事を先生は私に任せたのか、全くわかりません。

「古谷さん？終わりましたか？」

「わっ！？」

突然背後から先生の声がし、びっくりして心臓が飛び跳ねると同時にばかり途中の試料をこぼしてしまいました。幸い、薬品はすべて白衣に落ちただけで私は助かりましたが、先生の表情は曇っていました。先生から借りていた白衣には、無数の粉が散らばっています。

「それ、染料の一種なんですよ。派手な模様がついちゃいますね。」

「すぐに洗いますから！」

私は流して白衣をこすりましたが、先生の言うとおり、見事に色かにじみ、赤い模様が広がりました。

「ごめんなさい。」

「大丈夫ですよ。そんなものは。ところで、調製は全部終わったんですか？」

「いえ、まだ、全然……。」

先生は苦笑いを浮かべながら言います。

「もう、日が暮れ始めてますよ。」

「うそ!？」

背後の窓を見ると、白衣のように、雲に赤色がにじんできました。

「帰りますか？」

「ちゃんとやります。」

「無理しちゃ駄目ですよ。」

「無理、じゃないです。」

泣きそうな気持ちでした。一生懸命やったつもりでしたが、結果的にたいした手伝いもできず、拳げ句の果てに迷惑を形に残してしまつたのです。先生の期待も裏切つたような気がしました。無論、端から期待なんてされていなかったんでしょうが。

「じゃあ、続きをお願いします。」

先生はそういつて私を再度天秤の前に座らせ、作業を再開させました。

作業を初めて、ほんの数秒で、先生はあることに気づいたようです。

「薬品、触るの初めてですか？」

「はい。」

私は即答します。

「それならそうと言ってくれれば良かったのに。すごく手つきが危ないから、もしかして、と思つたんですけど。そうですね。まだ、実験は無いですよね。」

先生はともおかしそうに笑つて言うので、私は恥ずかしくなってきました。

「ごめんなさい。こんなに時間がかかるとは思つてなかったんで。

古谷さん、よっぽど不器用なのかと思ひましたよ。」

「え？私、そんな風に思われてたんですか？」

「失礼しました。全部僕が悪いんです。天秤の使い方も間違ってますよ。」

「ええ！？」

「全部やり直しですね。」

そういつて先生は私の横に座り、別の試薬を天秤に乗せながら説明をしてくれました。瓶から天秤へと薬品を移すその手つきは、まるで作法を教えるかのようにきれいな動きで、私は見入ってしまいました。しかし、数値を読み取りメモをしたその文字は、やはりあの崩れた文字でした。

きちんとやり方を覚えた私は、先ほどの自分からは信じられないほど器用に作業をこなしていました。先生も作業に加わり、気がつけばすべて終わってしまったのです。私が一人で何時間もやってきたことが、二人で、たった数十分で終わってしまったのです。

さっきまでの時間はいつたい何だったんだろうと、無駄な時間を嘆きましたが、良い経験になったと前向きにとらえるしかありませんでした。

私の知らない先生を少しでも知りたいと思っていたのに、予想以上に壁が厚く高くあることに気づいただけでした。それでも今は、そんな壁を何とかするために、私なりの努力をしなければいけないと思うのです。その気持ち、私の駆動力であることに変わりありません。きつと、こういうものがあるから進める、と強く感じています。

「終わっちゃいましたね。こんな事ならきちんと説明しておけば良かったですね。」

「もう覚えましたから、大丈夫です。いつでも任せてください。」

調子の良いことを言って、また失敗するのは目に見えています。

……。

「また、機会があればお願いします。」

先生の一言が、うれしくてたまりませんでした。

「ところで、古谷さん。テスト勉強の方は進んでいますか？無駄に時間を使わせちゃって、予定狂っちゃいませんか？」

「テスト……？まだ先じゃないですか？」

「もう二週間前ですよ。そろそろやり出さないと、結構難しいですよ。」

「……頑張ります。」

一気に現実に引き戻されてしまいました。テスト中も遠慮なしに先生の研究室に通い続けるつもりの方は、たいして苦にもなりませんでした。むしろ、それを口実に、さらに時間を作れるような気がしていたのです。少しずるいような気もしましたが、チャンスは最大限に生かすべきだとも思っただのです。

「さて、そろそろ帰りますか？」

「はい。」

その日の私は素直に家に帰りました。

## 7話：告白

先生のいったことは、やっぱり正しかったようです。試験を甘く見ていた私は、やってもやっても終わらないという重圧と、それでもやらなければならないという息苦しさで悪夢のような日々を過ごしています。家に帰ってもわからないことばかりでいっこうにはかどらず、結局先生の部屋で勉強を続けてきました。

先輩達にも教えてもらいながら、何とか絶望的な状況からは脱出しましたが、今までにない情報量のせいで頭の中には絡まった糸のかたまりが、私に挑戦するかのごとく居座っています。どれだけ詰め込んで、これを使いこなさなければ何の意味もないのに。

中島先輩も井上先輩も、何でもないようにクリアしてきたことが、私にはこんなにも難しいなんて……。それだけ、この部屋の人間のレベルが高いんだと思うしか仕方ありません。勉強する、と言うことを前提にここにいる私は、その違いがそのまま相手との距離になるような気がしました。そうやって、先生との距離も今まで以上に感じずにはいられませんでした。

「だからって、テストには何の関係もないけど……。」  
誰もいない研究室で独り、再度、教科書、ノートと格闘を開始しようとして試みましたが、一度脱線してしまった頭はそう簡単に戻るものではありません。かといって別に頭をはたらかせる余裕もないのです。教科書を見れば意味不明な文章が並び、ノートを見れば流れのないただのメモが散らばり……。拒否する頭に同情したくなるのも事実です。必死に解読を試みても、少しすれば、それは睡魔との戦いになるのです。授業中眠たくなるのは、頭がそれを拒否しているから、と先生が言っていました。まさにそのとおり。

ほっぺたをつねってみたり、たたいてみたり、無駄にペンを走らせてみたり……。何をしても眠さが優勢で、ついに、目を閉じ、手からペンが抜け落ち……。

「うん……やばい、寝てた……。……ん？」

目が覚めて、一番最初に背中の中の暖かさを感じました。先生のグレーのスーツの上着がかけられていました。胸の奥にも暖かさを感じました。

「やっと目が覚めましたか？」

実験室から戻っていた先生は、いつものように机に向かっていました。

「何度声をかけてもたたいても起きないから、どうしようかと思いましたがよ。その割に寝言だけはしっかりしてましたし。」

「へ……？私、変なこと言ってますでしたか？」

「僕を、何度か呼んでいました。」

一瞬で顔の温度が上がり、恥ずかしさをこらえる反面、心の奥は凍るような気持ちでした。私の先生に対する気持ちは、絶対に知られてはいけないものだと思ったのです。知られてしまえば、すべて消えてしまうような気がしていたのです。それを勘づかせるような事を、無意識のうちに繰り返していた。自分の中で何かが壊れていくような感じがしました。

「なんで、泣いてるんですか？」

「え……？」

知らぬ間に流れていた涙は、壊れてあふれ出した感情でした。

「ずるいですよ。そうやって、泣いてごまかそうとするなんて。」

先生のまっすぐな瞳に耐えられなくなって、うつむき、あふれる涙も気にせず、ただ胸の奥の痛みに耐えていました。

「あなたはいつもそうです。何でも一人で悩んで、解決しようとして。その反面、必死で何かを隠すように、悲しい目をして。自分のことに向き合うその気持ちは大切です。でも、結果、自分を苦しめるだけならば、誰かに相談することだってできるでしょう？つらい

んです、ただそれを見ているのも。何に悩んでいるのかは知りませんが、話を聞くくらいなら僕だってできますし……」

「先生にはわからない！わかるはずがない！何も、何も……。」

「またそうやって。僕だって、聞かないことにはわかるわけも無いじゃないですか？」

「だったら、先生？私が先生を好きだと言ったら、どうしますか？

……ね？何もわかってなんて、くれないでしょう？」

ぴたりと先生の動きが止まりました。同時に先生の手を離れたペロンが机から転がり落ちました。先生はそれを拾うと、私の正面に立ちました。

「……受け止めますよ、全部。きちんと、答えますから。」

「先生？私は慰めなんていらぬんです。だから、そんな風に……」

「慰めなんかじゃありません。僕がどんな気持ちでいたかなんて、知らないでしょう？話さないと、何もわからないんです。ね？」

先生の言葉はひどく優しく、心の中が解放されるように不思議な感覚が広がりました。

「他の誰にも許されない気持ちも、あなたなら、許してくれますね？本当に、あなたを大切に思っているんです。」

返事をしたいのに、のどが詰まって声は出ません。代わりに止めでなく涙が流れていきます。もどかしくて、でも、どこか幸せで……。こんな気持ちを私は知りません。

「もう泣かないでください。」

そつと先生の指が触れ、私の涙はぬぐわれました。

テスト最終日は私の嫌いな雨です。服や鞆がぬれて大変な思いをしているクラスメイトも何人かいます。しかし、テストが終わった感動はその憂鬱な気持ちの何倍も大きいようで、教室には歓喜の声がこだまします。私の元にはすぐさま中島先輩からメールが届きま

した。『テストの打ち上げするから、ざきつちの部屋へ集合』だそうです。本当にこの人は元気で。それでも、テストはきちんとなしていたんだと思うと、自分が悲しくなってきました。あの日以来、先生の部屋で勉強するのも集中力が持たなくて、絶望的な状態になつてしまったのです。どれも自業自得なのですが……。この際、そんなことはすべて忘れて、打ち上げに全力投球します。

「こんにちは……。」

中島先輩が待ちくたびれているだろうと、急いで部屋に行きましたが、そこは予想外に静かで、いつものように先生が机に向かっていました。

「中島先輩たち来てないんですか？」

「さっきまでいましたけど、うるさいんで追い出しました。僕は仕事があるのに、車出せつて……。無理に決まってるじゃないですか、ね？」

「そうだったんですか。ストレス解消と思ってたんですけど。今頃先輩達遊び回ってるでしょうね。」

「かわりと言つては何ですが、今晚、一緒に食事なんてどうですか？少し遅くなるかもしれませんが、それでも良ければ。」

「喜んで！」

初めての二人きりの時間がうれしくて、さっきまでのことがすべて吹き飛んでしまいました。そして、さらに、あの瞳に愛しさを感じるのでした。

待ちに待った夏休み。セミがうるさいのが悩ましいところですが、夏だと思えば当たり前の事です。

しかし、いくら夏だといっても、納得できないことがあります。

例えば……この課題の山。大学生といえば、恋に遊びに勉強に、と有意義なキャンパスライフをイメージしていましたが、現実はやはり甘くありません。

本当は、先生と二人で会う時間もほしいのですが、立場上わがままはいつていられません。

「ああー、もういや……。」

真夏の午前11時、古谷鈴音、挫折。

真面目な学生を称して先生の研究室に入り浸り、コツコツ課題もこなす予定でしたが、敵がこんなにも多いと不戦敗です。人生あきらめが肝心。勉強は気が向いたときにやってこそ初めて意味があって、はかどるものなのです。

立ち上がり、コーヒーをグラスに注ぎ、シロップとミルクを少々。ほろ苦い香りにしばし癒しの時間。こんな何気ない時間が最近宝物のように思います。先生の影響でしょうか、のんびりと物思いにふけるのも有意義に感じます。

そうはいつても脳裏に浮かぶのは先生の事ばかりですが……。そういうえば、先生、かかって来た電話をとって外にでたきり帰ってきませんが、どうしたんでしょうか？

心配になってふと時計を見ると、同時に珍しく不機嫌な先生が姿を現しました。

いつもの机に向かうなり、携帯電話を放り出して「充電切れた。」の一言。ブラックコーヒーを用意して差し出すと、一口飲んで、今度はため息。本当に珍しい光景です。

そんな時間もほんの一瞬。顔を上げた先生は、いつもの笑顔を浮

かべていました。

「課題、はかどりましたか？」

相変わらず先生は痛いところを突くのが得意です。私は苦笑するしかありません。

「休みに入ってまだ3日でしょう？気長に進めればいいじゃないですか。それより、予定とか無いんですか？」

「予定……全然無いんですよ。みんな何かと忙しそうですし。先生こそ、毎日学校で暇なんじゃないですか？」

「仕事ですからね。」

「休み無いんですか？」

「もちろんありますよ。」

「じゃあ遊んでくださいよ。」

先生と付き合い始めて二ヶ月、食事などには数回行きましたが、それ以外は無に等しいのです。私はそれが不安で仕方ないのです。ほら、今みたいに難しい顔をする余計に。

「そうですね……、今週末は空いてますか？日曜日。」

「私は大丈夫ですけど……その日は、先生が忙しいんじゃないですか？」

「知ってたんですか？」

「はい。井上先輩が楽しみにしてましたよ。」

「そうですね。まあ、それなら話は早いですね。勉強してください。」

「そう言っただけ先生はチラシを一枚差し出しました。その紙面には先生の名前も印刷されています。井上先輩いわく、大学生などを対象にした化学に関するフォーラムがあって、先生は発表者として参加するそうです。他にも、様々な企業や大学から研究者が集まるらしく、こんなチャンスは滅多にないとか……。私にはよくわかりませんが。」

「さっきは気長に進めればいって言ったのに、結局、勉強ですか。」

「強制はしませんよ。あくまで誘いです。」

「……行きますよ。ところで、この坂上っていう人、有名なんですか？私、全然知らないんですけど、井上先輩が一番楽しみにしている人みたいで。中島先輩も喜んでましたけど。」

チラシから目を離して先生の顔を覗き込むと、いつになく曇った瞳がありました。

「先生？」

「……有名、ね。確かに有名ですよ。」

先生は何かを押さえ込むように声を発すると、それを残して、また、部屋から姿を消しました。

約束の日曜日、幸か不幸か晴天となり、今日もセミの鳴き声がうるさい一日になりそうです。

と言っても、うるさいのがセミだけならまだましです。先生の車の後部座席に座る中島先輩と井上先輩、どこからその元気が出てくるのか疑問です。話の内容は本当に様々。真面目な話をしているかと思えば、いきなり昨日のテレビ番組の話になるし、盛り上がったと思ったら話が食い違ったりするし……。不思議としか言い表しようがありません。

「で、中島先輩？最近、春恵さんとはどうなんですか？」

井上先輩が当たり前のように急に話を変えると、中島先輩は黙り込んでしまいました。

私が高校でとてもお世話になっていた春恵先輩はすっかりもので優しい人なのですが、意外にも中島先輩と付き合っていたのです。最初にそれを聞いて以来、その後の話はほとんど聞いていませんが、もしかしてあまり良くない状態にあるのでしょうか。そうだとしたら、かなりの確率で中島先輩が悪い気がするのですが……。

「うり坊、それ、本気で聞いているのか？」

「え？なんかまずいこと言いました？」

中島先輩の声はなんだかかすれています。

「俺はな、本当ならここにいなかったんだよ。本当なら……」

「今頃デートだったのに。残念でしたね。自業自得ですよ。」

今にも泣き出しそうな中島先輩の言葉をつなげたのは、先生でした。

「ぎきつち、助けしてくれよお。この悲しみわかってくれるだろ？おれもさあ、ウサギと一緒に寂しいと死んじゃうんだよ……」

「先輩のどこがウサギなんですか？」

「リンちゃんまで……。」

「一回自分がやったこと、考え直してみたらどうですか？」

「…俺、悪いことしたかなあ？」

「わからせてあげましょうか？」

先生の言葉に、中島先輩が不思議そうな顔をしてうなずきます。

「じゃあ、古谷さん、この話、よく聞いてくださいね。中島が彼女の家へ行ったときに、すごく感動した本がある、と言われてそれを借りることになったんです。その本はドラマなどにもなっている人気の恋愛小説。表紙は女性読者をターゲットにした雰囲気で、中島は全く興味がなかったそうです。内容は実話を元に作られていて、主人公の女の子の彼氏が最後に病気で死んでしまうという物です。それを借りて数日で読み切った中島はそれを彼女に返すときに感想を一言言いました。中島、何て言いましたか？」

「やっぱり俺はミステリーのが好きだなあ。って言った気がする。もしかしてそれがまずかった？」

「古谷さん、どう思います？」

「中島先輩、やっぱり女心がわかってませんよ。」

「うそ、なんで!？」

こんな風に考え込む中島先輩は見ていてちょっと楽しいです。かわいそうではありますが、このまま頭を抱える先輩を観察するのもいいかもしれません。井上先輩も少し楽しんでいるような。

「先輩、こんなこと僕でもしませんよ。考えてみてくださいよ。たとえば先輩がお気に入りの本を貸したとして、つまらないって言われたら、なんで？って聞きたくなるでしょう？それと同じです。共通の話題がほしいとか、いろいろあるじゃないですか。そういうときちゃんとわかんないと駄目ですよ。」

井上先輩の言葉に、中島先輩はどんどん落ち込んでいきます。でも、これくらい静かな方がいいような気もしてしまいます。

「もう少し、大人になるべきですよね。」

不意に先生がそんなことをつぶやきました。

「先生は、十分大人ですよね。」

私が答えると、先生はいつものようにほほえんでいました。

## 9話：先生 2

会場となる建物が見えてきた頃、急に空は曇りだし、ぽつぽつとフロントガラスに雨が落ちました。

「嫌な雨ですね。」

先生の瞳の色が、かすかに濁りました。

会場には大学生らしい姿はほとんど無く、多くは企業や大学の研究者のようです。はしゃぎまわる中島先輩と井上先輩はもちろん、場違いな気がしてどうも落ち着きません。

早めに受付を済ませてホール前にいると、スタッフの男性が先生に声をかけました。

「矢崎先生、お久しぶりです。」

「いきなり誰かと思ったら。先生なんてやめてくださいよ。」

「なに言ってるんですか。期待の新人、矢崎考輔。立派な先生じゃないですか。それより、来てくれてよかったです。ドタキャンされないか心配でしたよ。」

「菊池の頼みでなければ断っていましたね。」

次第に話が盛り上がり、長続きしそうな気がした私は先輩達と建物の中を見て回ることにしました。小学生のような先輩達と一緒にいるのは少し恥ずかしいのですが、一人でふらふらするよりはいいように思いました。

やっと落ち着いた先輩達はロビーのゆったりとした椅子に腰掛け、大きな窓越しに外を眺め出しました。

「雨ですね……。」

「雨だな。」

「なんかテンション下がりますね。」

「俺はお前のせいできっとくにごがってるぞ。」

「何言ってるんですか？中島先輩も井上先輩もさつきまですっごく元気だったじゃないですか。一緒にいるのが恥ずかしいくらいでしたよ。」

「相変わらずリンちゃんは厳しいねえ。」

「そういいながらまた窓の外を眺める中島先輩。」

「お、なんかセレブな感じの車が止まったぞ。」

その視線を追うように外を見ると、ちょうど、車から白髪混じりの初老の男性が出てきました。

「あの人、坂上先生だ！」

勢いよく井上先輩が立ち上がり、窓にくっつきます。その男性の周りがざわつきだしたところを見ると、本物のようです。

「やっぱり大物はオーラからして違うなあ。」

「だな。でもあの人うちの大学にいたんだろ？結構前の話らしいけど。」

「そうなんですか？俺も授業受けてみたかった……。」

「そんなにすごい人なんですか？坂上先生って。」

その言葉に井上先輩が反応しました。

「すごいどころじゃないよ！尊敬に値する！10年くらい前だったかなー、アメリカの研究チームと組んで環境問題の……」

「うり坊、お前はすぐに熱くなるな。リンちゃん、そろそろ時間だから、うり坊なんか放って行こう。」

「ちよっ……！放ってかないくださいよー！」

壇上と正反対な薄暗さは、眠気を誘うのに十分でした。

さつきまで小学生のようにはしゃいでいた先輩達は、一転して真剣な顔で聞いています。

それに比べ私は……話の内容が全くわからず、起きているのが精一杯、と言う状態です。すでに脳みそは拒否症状が出ているわけです。やっぱり私と先輩達とは頭の構造から違うのでしょうか？

「リンちゃん、大丈夫？」

中島先輩が小声で話しかけてきます。

「微妙です……。」

「次、ざきつちだから。これで午前の部は終わりだし、もうちょっとファイト！」

「はい。」

任せてください。先生の話なら起きて聞く自身はありますよ。先生が真面目に壇上に立つ姿を見るのは初めてで、すごく楽しみだったんですから。普段から授業する姿は見ていますが、こういう場面はなかなかないです。

先生が壇上に立つと、十分に目は覚めましたが、私までそこにいるかのように緊張してしまいました。

しかし、先生は授業の時と同じ雰囲気で、淡々と話を進めていきました。

いつもの先生。そう、あの瞳も。人を見ない、あの瞳も。

午前の部が終わり、私は会場から出て先生を待ちました。お昼は先輩達と別行動をとることにしたので、のんびりと二人きりの時間が過ごせそうです。

「先生！」

「お待たせしました。さて、お昼はどうしましょうか？午後の部は出るつもり無いので、少々遠くへ行っても大丈夫なんですけど。いいお店がありますよ。」

「サボリ、ですか？」

まさかそんな事するような人じゃないですよ？私知ってる先生は真面目で熱心で……。

「まあ、そんなところですね。菊池にもはっきりと言っておきましたが、了解してくれましたよ。」

そんな風に笑顔で言われても……。でも、私はこれ以上眠気に耐える自信がありませんし、考え方によってはこれはチャンスなのかもしれません。

私は結局、おすすめのお店に行くことにして、先生の後ろをついて歩き出しました。

「ところで、その菊池さんって何者ですか？」

「大学時代の後輩です。僕の二つ下なんですけど、なんだか妙になつかれてしまつて。このフォーラムを企画した会社に今は勤めてるんです。真面目そうに見えますけど、結構ドジで……。井上にてるかもしれませんね。」

楽しそうに話す先生。やっぱりこの笑顔には弱いです。

菊池さんとのエピソードはいろいろあるみたいで、あまり聞いたことのない先生の昔話なんかをいくつか話してくれました。

しかし、急に先生の楽しげな表情が消え、黙ってしまいました。

「先生？」

静かな瞳は、一人の人物をとらえていました。坂上先生です。その姿は徐々に近づいてきます。先生は鋭いまなざしを向け、しかし、何事もないかのようにその距離を縮めて行きます。二人がすれ違うその瞬間、先生は何も見てはいませんでした。

「挨拶もなしかね？矢崎君。」

先生はその瞳の色をよりいっそう冷たいものに変え、足を止めました。私は初めて、先生に恐怖を覚えました。

「あなたに挨拶なんて必要無いでしょう？」

「それくらい出来なくてどうする？相手に対して失礼だろう。」

「馬鹿馬鹿しい。」

「昔の君はもつと素直だったのに。いつからそんな人間になったん

だい？」

「言わせるんですか？」

「別にかまわんよ。ああ、そうだ、君の発表、見せてもらったよ。実に良かった。私も負けていられないねえ。」

「何なら、代わりに出ましようか？あなたより理論的な発表をする自信がありますよ。」

「今更君が壇上に立つても意味はないんだよ。会場は落胆するだろうね。期待していた私が出てこないのだから。それに、君が話そうとする内容はすでに世に出た物。私の模倣としか映らないのだよ。たとえ君が正しくとも。よく知っているだろう？世間が求める物はブランド、必要なのは名前なんだよ。君でなく、私の。さかがみきょういち坂上京一という名前が。」

先生の口元が微かにわらいました。

「人って、どうしてこんなにも虚しい生き物なんでしょうね？欲におぼれ、地位や名誉、金儲けのために必死になって。」

「君もその一人じゃないのかね？」

「一緒にしないでください。僕はそんな低レベルな物に興味はありません。」

「強がりだな。自分の不甲斐無さを認めるのが怖いだけだろう。それとも他に望む物があるとでも言うのか？」

「ええ、ありますよ。あなたには一生かけても理解できないものですよ。」

「人を馬鹿にするのもいい加減にしろ！お前にそんな」

「これ以上話しても時間の無駄です。失礼します。」

先生がまた出入口に向かう後ろを、私は少し距離を置いて着いていきました。

朝の雨が嘘のように晴れわたり、太陽の光が水溜まりに反射していました。

車で約十分。着いたのは、昔ながらの洋食やさん、といった雰囲気気の小さなお店でした。

車の中では、先生の苛立ちが感じられて、話も出来ない雰囲気と気まずさに押し潰されそうでした。

しかし、先生は席につくなり、いつもの顔で「お勧めは…」なんて話し出して、私はどうしていいのかわからなくなってしまうました。

「すみませんね。あんなところを見せてしまって……。」

あの時の恐怖感は消えていましたが、かわりに、先生と坂上先生との関係が気になってきました。いつもの先生を失わせるくらい的人物なのだから。ただ、このフォーラムの話が出たとき、最初に坂上先生の名前が出たときの先生の表情を思い出すと、触れてはいけないことなのだと思います。

結局、また頭の中がぐるぐるして、ほとんど会話も無いまま食事を終えてしまいました。

「デザート、いりませんか？」

「…先生、甘いもの好きでしたっけ？」

「いいえ、僕はコーヒーでいいです。……戻りたくないんですよ。最初からそのつもりでしたけど。」

先生はいたずらをする子供のような笑みを浮かべました。

「じゃあ、遠慮無く……、マンゴーパフェにします。」

注文後、すぐに出てきたパフェを食べていると、気分が少しずつ楽になってきて、いつものように会話ができる雰囲気を取り戻すことができました。女の子にとって甘い物の力は絶対です。その反面、私の中では、まだ坂上先生が存在が気になっていて、どうしても聞かずにいられない心境になっていたのです。

「先生、あの……坂上先生とはお知り合いなんですか？」

先生から明るさが消えました。  
やっぱり触れてはいけなかったと、後悔と不安が体を駆けめぐります。

先生はコーヒを一口飲むと、私の目をまっすぐに見ました。

「坂上先生が以前うちの大学にいたことを知っていますか？」

「今朝、中島先輩が教えてくれました。」

「僕はそのときの研究生の一人でした。」

「そのときに何かあったんですか？」

「こういいうい方はおかしいかもしれませんが、坂上先生が有名になったのは、僕の研究の結果です。」

私は意味がわからずに、先生の真剣で、どこか悲しげな瞳をじつと見つめていました。

「坂上先生は、当時アメリカのある研究チームと協力していました。名前のあるチームでしたし、それは他の先生や学生の中でも噂になっていました。僕は、真面目に勉強がたくて坂上先生の研究室にはいることを決めたんです。その先生の研究を見るチャンスがあると言うことは、チームの研究の一部を見ることができると思ったからです。僕の予想は的中しました。見習いのうちにその研究について勉強することができ、研究生となってからはそれらに関連した内容を進めることができました。最初は坂上先生から出される課題に沿って、それから発展を重ねて。僕は自信があっただけです。誰よりも真剣に研究に取り組み、誰よりも結果を得ただけ。けれど、現実とは違っていました。卒研の最終発表の直前に、坂上先生の所属するそのチームから新たな論文が発表されたんです。それは僕の研究成果と等しい物でした。」

まさか！そんな思いだけが唐突にわいてきました。

「それって、坂上先生が先生の研究を流してたって事ですか？」

「その通りです。」

「そんな……。」

「最終発表の時まで、僕はそれを知りませんでした。発表後の質問

である先生に指摘され、初めて知ったんです。そのときは何が起ったのかわからなくなって、坂上先生に助けを求めようと視線を向けたんです。しかし、先生は勝ち誇ったように笑みを浮かべているだけでした。僕は利用されていたのだと確信しました。」

ここに来る前の先生達の会話を思い出すと、妙な寒気におそわれました。坂上先生の話していたことが、いかに残酷であつたかと考えてしまうのです。

「僕は坂上先生に事実を公表するよう訴えました。世界に僕の名前を出す必要はなくても、大学側にだけでも僕の研究であることを示したかった。でも、坂上先生がそんな話を聞き入れるわけがなかったんです。他の先生にどれだけ話しても、結果は同じでした。坂上先生の言うとおりなんです。勝つのは名前なんです。ただの研究生が有名チームの名前に勝てるわけがなかったんです。」

私は返す言葉すら見つからず、ただ黙っていました。

「できることなら二度と会いたくなかったんです。今日、僕が参加したのは、菊池に誘われたからです。菊池も坂上先生の研究室に入りたがっていました。このことを知ってそれをやめました。僕の話を通じてくれたのは、たぶん、菊池だけだと思います。今回のメンバーに関して彼には決定権が無かったようですが、僕の後輩と言うことで任されたようです。だから、僕と坂上先生が会うことをおそれ、彼なりに頑張ってくれたみたいです。午前と午後に分けてくれたのも彼の努力の甲斐あつてのようです。でも、結局会ってしまつたんですよ。」

「今なら、先生の気持ちも、菊池さんの気持ちも、何となくわかるような気がします。だから……そんな風に我慢しないでくださいよ。」

はつきり言えば、他人のこと。でも、先生のことだから、悲しい話は聞きたくないと思いました。こんな私を見て、先生は困つたような顔をしましたが、私の様子をうかがうようにして話を続けました。

「負けたくなかったんです。過去があるからこそ、僕はここにいます。過去はどんなものも真実です。すべて、現実です。だから、それに打ち勝つ強さがほしかった。格好つけた言い方ですけどね。最初から坂上先生に会ったらガツンと言ってやるつもりでいたんです。微妙な感じになっちゃいましたけど。でも、僕はもう一度、自信を持ってた気がするんです。」

「先生……。」

「なんか、格好悪いですかね？」

私は首を思いつきり左右に振りしました。

先生の笑顔が、よりいつそう優しく感じました。

「そろそろ、出ましようか？」

勘定を済ませ、店の外に出ると、冷房の効いた涼しい空気から一転して暑く重たい空気に変わりました。

私が先生の横に並ぶと、お互いの手が触れあいました。そつと繋がれた手に私の体温は急上昇してしまいそうでした。たったこれだけのこともしれませんが、私の中では大きく変わった気がするのです。はつきりと言い表すことはできないけど、きつとこれが恋なんだ、なんて思いました。

フォーラムが終わる時間に合わせて戻り、真面目に聞いていたはずの中島先輩と井上先輩に合流して帰路につきました。

先輩達はなんだかぐったりしていました。行きとは打って変わって、車内はとても静かです。何時間も難しい話を聞いているのは、さすがの先輩達にも大変だったようです。

「勉強になりましたか？」

「あんまり……。集中力の限界って感じ。よく、ざきっちは平気でいられるよなあ。」

「慣れてますから。」

嘘です。慣れ以前に、会場にすらいなかつたんですから。先輩達が怒りかねないので本当のことは言いませんけど……。

「おっと、そういえば、途中でメールが入ってたんだった。誰かなあ……？」

中島先輩がポケットから携帯を取り出しました。

「……春恵だ。」

「別れようとか書かれてるんじゃないですか？」

今日のデートを断られてここにいる中島先輩に、冗談のつもりで言ったのですが……反応が無いので慌て様子を見ると、放心状態の先輩がいました。

「まさか……凶星？」

中島先輩のかわりに、井上先輩が苦笑しながら頷きました。

「いつどこで何が起きるかなんてわかりませんからね。」

明らかに先生はこの状態を楽しんでいるようですが……。

頑張れ中島先輩！何が何だかよくわかりませんが、私は中島先輩を応援します。

## 11話：先生と中島先輩

フォーラムから約一ヶ月、やっとあの暑さも落ち着いてきて、過ごしやすい時期がやってきたと思ったのですが、世の中そう甘くはないようです。

放課後、いつもなら先生の部屋に中島先輩も井上先輩もいて騒がし過ぎるくらいなのですが、今は、私と先生の二人だけです。きつと、今までの私なら、これほどうれしい時間はないのですが……。この雰囲気。あり得ないほどの圧力におそわれているようなものです。

全ての原因は、あのフォーラムの帰り、見事なまでに失恋した中島先輩にあるのです。

何度もメールや電話を試みたようですが、相手は、春恵先輩。相手にもしてもらえないようです。春恵先輩は私の高校時代の先輩で、とってもいい人だというのはよくわかっているのですが、その反面、正義感が強く、一度決めたことは覆さないという強い意志を持つ方であるのも事実です。こういっては失礼ですが、最初から私は、なんでこの二人が付き合っているのか不思議で仕方ありませんでした。中島先輩は春恵先輩と違って、自分に甘い部分がある気がするのです。現に今も……。「失恋したから勉強する気にならない。」なんて言って、卒業研究をサボり続けてるのです。出席日数の関係で授業は出ているようですが。

もちろん、そんな態度に先生はご立腹。最初はあまりの落ち込みように同情して大目に見ていたようですが、さすがにあれから一度も顔を出さない中島先輩に先生の怒りも爆発寸前、と言ったところですよ。

一方、井上先輩はと言いますと……。この現状に耐えきれず逃走中、だそうです。逃げ出したいのは私の方ですよ。まあ、必要もないのに先生の部屋にいる私が悪いんでしょうけど。

先生も先生で、けんかした後の子供みたいに機嫌悪いですし。もう何が何だかわかりません。

「先生、あの……」

「何ですか？」

「えっと、……今日も先輩達来ませんね。」

「あんな研究生いりません。」

「……。」

会話、続きませんよ。むしろ逆効果？

何か話のきっかけと話題を……。

ひとまず、先生に落ち着いてもらおうと、いつものようにブラッ

クコーヒーを入れ、先生に。

先生は「ありがとう」と言いながらいつもの笑顔。一応、笑ってはくれるんですね。

「冷房つけたままで換気してないと、空気も悪くなりますし。少し窓開けときますよ。」

日差しを遮るブラインドの隙間から窓に手をかけ開けてみると……

…雨。じめつとした空気が入り込み、この何とも言えない気まずさ。

かと思えば、焦る私を見て先生はなぜだか楽しそう。不本意ながら、これは状況改善となつたのでしょうか？

「ねえ、古谷さん。週末、暇ですか？」

「へ？ はあ、まあ。」

「どっちなんですか？」

「買い物に行くつもりだったんですけど。」

「一人で？」

「ええ、ふらふらーっと思うようになって。」

「じゃあ、同行させてください。」

「は？」

「僕はかなり暇なんです。」

ノーと言わせられないその表情、いつもよりプレッシャー二倍増しです。

「嫌ですか？」

「いいえ、そんな！是非！」

古谷鈴音、今日も先生に惨敗です。

約束の週末、私はいつもより洋服に気を使い、化粧もしっかりとして、気合い十分。何と言っても念願のデートですから。

肝心の先生はといいますと、至って普通。予想していた結果ですが。

もともと、私の気晴らしの買い物だったためか、先生は文句一つ言わずに私の買い物に付き合ってくれています。その上進んで荷物持ちまで……。駅近くのショッピングモール。洋服やアクセサリを買いに来た女の子にとってはとっても楽しい場所ですが、男の人はふつう、その買い物に付き合わされるのが嫌いだったりするんですよね。なんだか先生の笑顔がパワーダウンしてますし。

「先生？ 実はつまらないかと思ってません？」

内心、心配なのですよ。

「いいえ、別に。あえて言わせてもらうと、けっこうおながが空いています。」

「えっと……。……は？うそお！？」

携帯電話を取り出してみると、サブディスプレイに表示された時間は13時40分。とつくにお昼の時間は過ぎていきます。

「本当に女の人って買い物が好きですよ。古谷さんがあまりにも楽しそうなので止めなかつたんですけど。そろそろ、ご飯にしませんか？」

「はい！ もう、是非そうしましょう！」

すみません、先生。完全に時間の事なんて忘れていました。

「途中でオムライスのおいしそうなお店があつたんですが、そこでもいいですか？」

「もちろんです！」

さつき歩いてきた道を先生について戻ると、おいしそうなおいの漂うお店がありました。前を通ったにも関わらず、全く気づいていませんでしたよ。やっぱり先生は、よほどおなかを減らしていたのですね。もう食べるものまで決めていたみたいで、がらがらの店内の席に着くなり注文しちゃってますし。私はどうすればいいんでしょうか……？

「古谷さん？ 電話、なってますよ？」

「へ！？」

あわててバッグの中を探し、震える携帯電話を手に取ると……

「中島先輩からだ。」

その言葉に反応した先生は、あからさまに不機嫌な表情を作ったかと思うと、私の携帯電話を奪い、勝手に通話状態にしてしまいました。

『リンちゃん！あのさあ、』

ハンズフリー機能なんてついていないのに、中島先輩の声はまる聞こえです。

『今、うり坊と海にいるんだけど！ リンちゃんもおいでよお！！』

「へえ。よつぽど暇なんですね？」

『！？ ざきつちっ！？』

「いいですねえ、学生は。」

『え！？ は！？ なんでざきつちが？ これ、リンちゃんのケー』

タイだよなあ？ え？ ええ？』

「それがどうかしたんですか？」

『どうかしてるだろ？ ちよい、リンちゃんは？ リンちゃんは？』

「いますけど？」

『代わってくれよ。』

「嫌です。」

なぜ拒否するんですか？ それ、私のケータイですよ！ って言っても無駄でしょうね。

『わけわかんねえし!』

「それはこっちの台詞です。」

むしろ私の台詞です。

滅多に機嫌を悪くしない中島先輩ですが、今日の先生の態度には不満爆発という感じですよ。

「いったいいつまでふて腐れてるつもりですか?」

『そんなんじゃないよ!』

「だから子供なんです。すぐ感情的になる。」

『ざきつちにはわかんねえんだよ。』

「ええ、そうみたいです。」

『だったらほつといてくれ。』

「そうはいきません。きちんとやることやってもらわないと、僕が困るんですよ。」

『俺には関係ない。』

「ふうん。じゃあ、卒研の成績、欠点でいいんですね? 卒業できませんよ? 僕はもう一年君の面倒を見れるほど体力ありませんか。」

『それは……困る。』

「結局、どうしたいんですか?」

『あと、少しだけ待ってくれないか? ちゃんと卒研はやる。だから、夏休みが終わるまでは……。それまでには、きちんと自分の中で完結させとくからさ。』

「わかりました。しょうがないから待ってあげましょう。」

『マジで!? ありがとな、ざつきち!』

「ただし……、僕の貴重な時間を奪った罰として、おみやげを買ってきなさい。安物じゃ許しませんよ?」

『は!? 無理だつて! 金ないし!』

「バイトでもしたらどうですか? それでは。」

ピッ。ツーツーツー……。

勝手に電話も切っちゃって、最後まで私には代わってくれないの

ですね。

「ありがとうございます。」

「はあ。」

「腹が減っては戦もできぬって、こういう事なんですかねえ？ 怒る気もしませんでしたよ。」

「え？ ……そうなんですか。」

あれのどこが怒ってなかったんですか？ あからさまな表情していたじゃないですか。

先生の言葉にひっかかりながらも、携帯電話を受け取って鞆の中へ。

なんだか、また、会話が無くなりそうな雰囲気でしたが、そこへ救世主のオムライス登場です。

ふんわり卵はいかにもレストランという感じ。見ているだけでも幸せです。

「では、いただきましょうか。」

長い時間待たされて、やっと「よし」と言われた犬のように、先生のテンションは最高潮。

「すみません。」

思わずこぼれた私の言葉に気づくことなく、幸せの味にしばを振る先生なのでした。

## 12話：夜の海辺で

ショッピングモールでの買い物存分に楽しんで、電車に乗った時には空が赤くなり始めていました。

予想よりも長く買い物をしていて、私としてはちよつと予定が狂った程度ですが、先生は完全にお疲れモードです。いつもマイペースな先生がこんな風に疲れることは滅多にないんでしょうね。それに加え、インドアな人なので、一日中歩き回ることも無いのかもしれない。

これ以上疲れさせるのはやめようと、どんどん暗くなっていく空を何も考えずに眺めていました。

「海、いいですね。」

「どうしたんですか？ いきなり。」

「海に行きたいと思って。」

「中島先輩達について行けば良かったんじゃないですか？」

「何で中島と行かないやいけなんでしょうか？ つまらない。」

「私となら楽しいんですか？」

「ええ、かなり。」

言わせておきながら、何となく恥ずかしいのですが……。

「海、行きましよう？」

「いいですけど……、いつ行くんですか？」

「今からですよ。」

「今から？」

先生の行動はいつも突然。

確かにこの辺りは海沿いの町ですし、すぐに行くことはできますが、こんな時間に行ってもしょうがないんじゃないでしょうか？

「次の駅で降りましよう。近くにマリーナがあるんです。」

「はあ。」

なんだかよくわかりませんが、先生がちよつと元気になった様子

なので、ついて行くことにします。

駅を降りて歩くこと約十分。海に着く頃には、塩の混ざるねっとりとした空気に覆われていました。

完全に夜となり、海辺で頼りになる明かりは、レストランなどの入った小さな建物だけです。

先生は砂浜までは行かずに、手前の階段に腰を下ろしました。

夜の海は、暗くて寂しいだけだと思っていました。花火をする子供や散歩をする人もいて、意外と賑やかな雰囲気でした。昼間よく晴れていたおかげか今も雲が無く、また、視界を遮る物が無いここでは、何にも邪魔されることなく、星を眺めることができます。

「結構いいものでしょう？」

そういいながら、先生の視線は、ずっと続く暗い海をとらえていました。

波は心地よいリズムで、穏やかに繰り返し、こちらへ来てもすぐに返ってしまいます。

「先生は、よく来るんですか？」

「たまに一人でうろついていますよ。」

「それって、不審者なのでは……。」

「そうですね？ 考え事をしながらよく来るんです。」

こんなことを言っただけは失礼かもしれませんが、先生ってあんまり考え込むタイプじゃないと思っていましたよ。誰でも考え事はすると思いますけどね。でも、やっぱり先生が必死で考える事って、かなり大事なことが、私には考えられないような大きな話だと思っただけです。そうでないとしたら昔のこと。フォーラムの時に再会した坂上先生の事なんて特に根に持っていて、たぶん、一生引きずるんだらうと思ったのです。でも、信頼していた人に裏切られた時の痛みが、先生の動力になっていることも間違いありません。

「僕はこれ以上行くことができない、いいえ、行けなかつたんです。」

先生は、話を変えるのも急なんです。そう思つてのぞき込んだ瞳は、ずっと遠く、海と空が闇に変わる様子を見つめていました。こつこつという時、なんだか先生が遠く感じるのです。

「でも、どんなチャンスを与えられようと、その先には恐怖が立ちふさがっているんです。」

「先生にも怖いものはあるんですね。」

何を意図した話かさっぱりわかりませんが。

「……失つてしまう恐怖。」

「失つてしまう？」

「生きていく以上、その節目節目に終わりがあつては困ります。そこで何がとぎれてしまう。多くは別れ。関係性がなくなつてしまつていす。時間の流れと共にそれは思い出になつて、次第に、大切な人の顔も声も一緒に見た景色も、何もかも忘れていくんです。たとえ、どんなに自分が強く想つていようと、……想っているからこそ、そのときが怖くて仕方がないんです。」

先生が思い詰めたように悲しい顔をして、私にはどうすることもできません。

でも、何となくわかるのです。

私が先生を好きになつたとき、先生に私の気持ちがあつてしまつたとき。先生といるだけで楽しくて、幸せで、それ以上のことは望んではいけないと思つていました。言つてしまつた瞬間、その全てが壊れてしまつたような気がしたから、失つてしまつたと思つたから。あのときは、ただ、怖いと思つていました。きっと、今の先生も同じなんだと思つたのです。

「先生、怖くても、それを乗り越えたときに見えるものがありますよ。」

励ましにもならない言葉を返して、そつと、先生の肩に寄り掛かりました。

「そこにあるものが、望んでいたものであればいいですね。」  
今度は先生の腕が私の肩に回り、ぐっと、抱き寄せられました。  
少し冷たい海風の中で、先生の体温は心地よく、夢を見ているか  
のような優しい気持ちに包まれました。

### 13話：尾行

誰が夏休みの宿題を考えたのでしょうか。むしろ、誰が夏休みを考えたのでしょうか。私はその人に問いたいと思います。何が休みだ、と。

私の前には相変わらず課題の山がそびえ立っています。

先生達も考えてくれればいいものを……。塵も積もれば山となる。「夏休みだからできるでしょ。」と誰もが言ったら、かなりの量となるに決まっています。

この状況を冷静に分析した結果、毎日図書館に通って進めることが最善策との結論に至りました。

そんなわけで、朝から電車で揺られているわけですが……。何とも眠い。いわゆる拒否反応ですね。

私の前には高校生と見える女の子三人が、いかにも、遊びに行きます、という恰好で騒いでいます。化粧の仕方を間違ったのか、それがかわいいと思っっているのか、顔がお祭り騒ぎになっていますよ。それも若さゆえですね。若いつて羨ましい。

むこうのお姉さんも、デートです、と言わんばかりの気合いの入りで。世の中はなんて不公平なんでしょう。

不意にため息をつく、さらに気分が落ち込んでしまいました。

何となく気になって、もう一度、ちらりとそのお姉さんを見ました。どこかで見えたことがあると思ったら、春恵先輩じゃないですか！

思わず声を出しそうになりましたが、ここは我慢です。

でも、何で春恵先輩が……？

中島先輩と春恵先輩が別れたのは夏休みの始め。その後、落ち込んだ中島先輩は何度か見ましたが、いい話は一度も聞きませんでした。春恵先輩からもそういう話題は一切ありませんでしたし、もちろん新しい彼氏が出来たなんて聞いてませんよ。

でも、いつもよりお洒落な感じだからといって、必ずしもデートな

わけではないですし、友達と遊ぶという可能性も大です。学校に行くだけというのも無きにしてもあらず……。これは課題どころではないですね。

春恵先輩の観察を始めて十分経過、大学の最寄り駅に到着です。先輩がやっと顔を上げたので降りるのかと思いましたが、窓からホームを覗いて人探しをしている様子。

結局誰も来ないまま電車は出発してしまいました。が、今度は携帯片手に、車内をキョロキョロ……。私の存在が気付かれそうできどきです。

少しして、別の車両から移動してくる人が……。って、中島先輩じゃないですか！？やっぱりそういうことなのですね。

春恵先輩のさっぱりした性格からして別れた相手とわざわざ遊んだりほしくないでしょうから、これは確実に元に戻ったと言うことですよ。すると今度はなぜ戻ったのか、と言うよりなぜ別れたのかが気になりますよね。このまま先輩達の後をつけるのはおじゃまでしょうが、私は好奇心で動きますよ。

先輩達の後をつけてやってきたのはショッピングモール。以前、私と先生が買い物に来た場所です。どこも人がいっぱいなので、見失う可能性も大いにありますが、その分こちらが見つかる可能性は低くなります。もし見つかったとしても、買い物に来て偶然会うことなんてよくありますから、何ら問題はありません。

やっぱり買い物となると、春恵先輩ペースなのです。まるで犬の散歩でもしているかのように、春恵先輩が中島先輩を引っ張って……。もちろん、中島先輩が犬ですよ。ちよつとやんちゃな犬を引

つ張って、ご主人様が自分の行きたい方向に連れて行く感じ。見ていてちよつと羨ましい感じもします。私と先生ではこんな風につきあえません。どこかに境界線がひかれているような気がして、距離を感じずにはいられないのです。それはしょうがないことなのかもしれないませんが。色々考え出したらちよつぴり気分が落ち込んできました。

尾行なんかやめてさっさと課題を終わらせようと思ったそのとき、  
「リンちゃんじゃん!」

「な、中島先輩!」

「あれえ、古谷じゃん。買い物?」

こういうとき、意外と平常心じゃいられないものなのです。中島先輩に声をかけられ、かなり焦ってしまいました。春恵先輩まで来ちゃいましたし、今更ながらに後ろめたさが全身を駆け巡ります。しかし、怪しまれるのはいやなので春恵先輩の問いかけには「気分転換に」と返しておきました。ある意味、真実です。

「リンちゃん、最近ざきつちのどこ行ってる?」

「いいえ、あんまり……。課題とかたまっちゃって時間もなくて。」

「ふうん。それで矢崎が寂しがってるって話?」

春恵先輩? いきなり何を言い出すのですか!? なんだか中島先輩も楽しそうな顔をしていますし。色々と怖い感じがするのですが……。

「ピンポン! ご名答。ざきつちは今、恋の病にかかっているのだよ。」

「何の話ですか?」

「何の話って、リンちゃん、ざきつちと付き合ってるんだろ?」

「は? えーっと、何の冗談でしょうか?」

いいながら顔が真っ赤になるのがわかりました。必死で隠そうとしているのに、これじゃあからさまに、はいそうです、と言ってるよなものですよね。そんな私に、中島先輩から思わぬ一撃が。

「え、だって、ざきつちからそう聞いたんだけど?」

なぜ！？目の前が真っ白になるってこういうことを言うのでしょうか？

「少し前にさ、ざきつちのところ行ったらすつごくきげんよくってさ。久しぶりに飲みに行こうなんて言うから喜んでついてったわけ。俺も楽しくなってきてさー、調子乗ってざきつち酔いつぶしたら、まあ、のろけ話をたつくさん聞かしてくれたってわけよ。それにさ、前に俺がリンちゃんに電話かけたとき、ざきつちが出たたる？あ、のときも一緒にいたって事じゃん？音楽とか聞こえてたし、学校じゃなかっただろ？」

「まあ、それはそうですね……。」

「別にいいんじゃないの？ほら、数学の岡野、もうおじいちゃんだけどさ、あの先生の奥さん、教え子でしょ？私の友達にも中学の先生と結婚した子がいるし、よくあることなんじゃない？」

「はあ……。」

そんなものなのでしょうか？今まで私が気にしすぎていただけなのでしょうか？実際、おおつぴらにはできない事だと思うのですが、神経を使いすぎるのも良くない気がします。先輩達がこれを知ったところで全く問題は無さそうなので、あまり深く考えないでおこうかと思えます。むしろ、この先輩達にそんな話は聞き入れてもらえそうもないので。

ところで、私も気になることがあるのですが……。

「先輩達、元に戻ったんですか？」

私が素朴な疑問を口にする、春恵先輩は笑いだし、珍しく中島先輩は赤面しています。

「ああ、あれ？夏休みのはじめに研究室のみんな、矢崎に連れられて学会かなんか行ってたでしょ？あの日に私たち遊ぶ約束してたんだけど、ドタキャンみたいに断られたからちよつとむかついてたの。別れてやるってメールしたら、返信も来ないし。古谷に聞いたら毎日泣き叫んでて手のつけようがないとか言うでしょ？私もさ、嫌いになつてたわけじゃないし、ちよつと困らせてやるうと思

っただけだったんだけど、よりを戻すタイミングを失ってしまった  
というか、ちよつと面白くなってきたというか……。まあ、そんな  
ところ。別に、たいしたことじゃないのよ？」

「俺の夏休みはあんなに寂しかったのに……。」

「いいじゃない！ あれからちゃんと毎日メールもしてるし、電話  
もするし。中島君のわがままも聞いてるでしょ？」

そうですか。なんだか私が勝手に心配してただけなんですね。

先輩達には今日一日だけでもかなり振り回されたような気分ですよ。  
わざわざ私の目の前で痴話げんかなんか始めちゃいましたし。先輩  
達の心配より、自分の心配をするべきでしたね。さつさと大学に行  
って課題を終わらせようと思います。

と言うことで、私、帰ります。

## 14話：悩み事

夏休みがあつという間に終わり、気がつけば少し肌寒い季節になりました。

あの山積みの課題も何とか無事に終わらせることができ、と言っても同じ授業をとっている子にレポートを借りて終わらせた部分が多いのですが……、とにかく、何とかなつたわけです。夏休みの終わりは課題で手一杯だったのでほとんど遊ぶ事ができず、こんなのでよかつたのかと自問自答を繰り返していたのですが、終わってしまったものは仕方ありません。多くの学生は二ヶ月の間遊び続けていたようで、久しぶりの授業に苦痛を感じているようです。もちろん、私も授業を聞いているのはつらいのですが、課題のおかげでテスト週間並みに勉強をしていたので少しはマシなはずです。

それにしても、休み明けというのは雰囲気さがらりと変わるものですね。休み中の話で盛り上がっている人たちはいつにも増して元気そうで、教室全体がにぎやかに感じます。休みを機にイメージチェンジを試みた人もちらほら……。大学入学と同時にほじける人もいますが、ちよつと様子を見てから、といった感じでしょうか？ たった半年間ですが、全く知らない土地にやってきた人、逆に知らない土地からやってきた人との出会いの中で、自分の中の色々なものが変わっている気がします。私は放課後のほとんどを矢崎先生の研究室で過ごして、中島先輩や井上先輩と仲良くなつて、それだけでも人脈がとつても広がつたように感じます。先輩達が一人で何人分ものパワーに満ちあふれているせいかもしれません。

この中でも、色々と変化がありました。私は偶然にも高校時代の先輩の春恵先輩に再会しました。再会したそのときに、春恵先輩と中島先輩が付き合っていることを知りました。すごく仲が良くてお似合いだと思つていたら、夏休みのある日、突然別れてしまいました。かと思つたら夏休みの終わり頃には何事もなかつたように元に

戻っていました。しかし、この人達はやつかいです。私と先生の関係を知っていたのですから！ しかもそれを何とも思っていないのです。それはそれでありがたいのですが……。

私と先生はつきあい初めてもう四ヶ月ほどになります。オープンにするでもなく隠すでもなく、特にこれと言って意識はしていませんでしたが、まさか、真つ先に中島先輩に知られてしまうとは思いませんでした。必然的に井上先輩にも春恵先輩にも広まってしまうたわけ……。それ以上はわかりませんが、たぶん大丈夫でしょう。でも、今まで私が一生懸命になって先生の研究室に通っていた理由がばれてしまったわけで、今更ながら、恥ずかしさも生まれてしまったのです。研究室に行ったところで、中島先輩にひやかされるのも目に見えているわけですし。なんだかんだであんまり先生と会っていません。まあ、午後の授業で嫌でも会うことになるのですが。

突然、ポケットの中の携帯電話がメールを知らせ、私はあわててそれを手に取りました。考え事の最中に急に現実に戻されると、焦りのようないらだちのような嫌な気分になります。授業中にメールなんて失礼だ、と自分勝手なことを思いながらもそれを開けると、矢崎先生からでした。「午後の授業の前に、研究室に来てください」とだけ書かれていました。

何となく気まずい気持ちを抑えて、ご飯を食べた後に先生の研究室に向かいました。

ノックをしたら返事だけは返ってきましたが、先生はパソコンに向かい必死でキーボードをたたいて、なんだか忙しそうです。

「あのお、先生？ 何か用事でしたか？」

返事はありません。

「先生？」

少し強く呼んでみましたがやっぱり返事はありません。

パソコンの画面しか見ていない先生の横に立って声をかけると、びっくりして、「来てたんですか？」の一言。ええ、来てましたとも。

「ノックしたら返事してたじゃないですか？」

「してました？ 全然記憶にないです。」

「その後だって声かけたのに気づかないし、どうしようかと思いましたがよ。」

「すみませんでした。」

しつかりしてくださいよ、先生。

「何か用事ですか？ まさか、それまで忘れてたなんて言わないですよね？」

「それは大丈夫です。えっと……そのプリントを講義室まで運んでもらえますか？」

そのこのプリントって、たいした量じゃないじゃないですか。

「そのために呼んだんですか？ このくらい自分で運べるじゃないですか。」

「古谷さんは僕のお手伝いさんでしょ？」

「確かに、何でも手伝いますって前に言いましたけど……。授業中に送ってくるくらいのメールだから、もっと大切な用事だと思っただのに……。一番最初の授業資料くらいの量ならともかく、このくらい先生自身で頑張るべきです！」

手伝いとか言うレベルではなく、これはただのパシリですよ。

強気になって言うと、先生は反省する様子もなく機嫌良さそうに笑っています。

「最近、古谷さんが来ないから、元気になって心配してたんです。でも十分元気そうですね。安心しました。」

先生の笑顔に思わず赤面です。なんと言いますか、カウンター攻撃を食らったような……。しかも一撃必殺です。私は今でもこの笑顔に弱くて、この一撃ですぐに先生のペースに持って行かれてしま

うのです。

「忙しいなら別ですけど、暇があったらいつでも来てくれてかまいませんよ。後期に入って中島も井上も真面目に実験を始めて、放課後も時間がない日が多くなりましたけど、全然問題ありませんから。」

「忙しくはないんですけど、久しぶりの学校で毎日バテちゃうので体力が戻ってきたら毎日でも来ますよ。」

本当はあまり気が進まないだけなのですが。

「そうですね。体調には気をつけてくださいね。」

「はい。」

「そろそろ、授業行きましょうか。」

結局私はプリントを持って先生の後ろをついて行きました。

参考資料のプリントが配られ、それをもとに授業は開始しました。久しぶりに見る先生の冷たい眼差し。忘れていたそれに一瞬、恐怖のようなものを感じました。

先生は相変わらず、誰も見ていません。この空間は自分とその他でしかないのです。それを感じるたびに、私と先生の距離が生まれます。ここでの私は先生にとっての特別でも何でもなく、その他の一人だと実感するのです。でも、それのおかげで勉強と恋愛とのけじめをつけることができるのです。たいして成績の良くない私が言っても説得力のかけらもありませんが、私の中ではきちんとしているつもりなのです。いいえ、つもりだったのです。

実は、こんな事があったのです。

夏休みが終わる直前の学校で、私は井上先輩に会いました。図書館で当たり前のように勉強をしていて、邪魔をしては悪いかなと思っていたところ、気がついた井上先輩から声をかけてくれました。いつも通り元気で、図書館内にしては少し大きな声で話をしていま

した。夏休みの旅行の話や中島先輩の話、夏バテした話……。色々  
と盛り上がっていたのですが、先生の話が出た途端につまらなさそ  
うな顔になってしまいました。

「リンちゃんさ、矢崎先生と付き合ってるってほんと？」

こんなところでその話題を出さないでください。他の人に聞こえ  
たらどうするんですか。そう心の中で叫んでしまいました。が、幸運  
にも夏休みモードな学生が集まった図書館はいつもの何倍もの騒が  
しさにその心配は無さそうです。

「中島先輩から聞いたんですか？」

「そうだけど。俺は本当かどうか聞いているの。」

「……本当です。」

井上先輩はノートに目を向けたまま、黙り込んでしまいました。

しばらくして、先輩は「ずるいよ。」と小さく口を動かしました。  
「リンちゃんはずるい。俺がこんなにも頑張つて必死になつて横  
で、遊んでるだけなんだから。気に入られたいとかじゃないけど、  
俺は勉強したくてここに来て、もっともっと知識も技術も身につけ  
て、やっぱり先生に認めてもらいたいと思ってる。大学院にも行き  
たい。行って研究を続けたい。そのためには今やらないとだめなん  
だ。この時期の成績だとか、もちろん卒研に関する事も今後に影響  
するし、そういう重要な部分を邪魔されるのはごめんだから。時  
間を奪われるのもね。」

先輩の言う通かもしれません。私はただ、遊んでいただけなので  
す。

大学生になつたところで何の目標も無く、いいえ、あの日に先生  
に会ってから私の意識はそちらばかりで、肝心な部分は見失ってい  
たのです。真面目な学生をよそおって毎日のように先生の時間を奪  
い……。結果的に私と先生にとっては意味を成すものとなつたかも  
しれません。しかし、その代わりに私は先輩の時間を奪っていたこ  
とに違いありません。

一生懸命頑張ろうとしている先輩の邪魔をしていたことに気付か

され、何も返事ができず、今度は私が黙り込んでしまいました。

「別にリンちゃんを責めたいわけじゃないんだけどさ。先生も先生だし。でも、俺の言いたいこと、わかってくれるよね？」

「……はい。」

「ほんとにわかってる？ 要ははじめをつけてくださいってこと。それ以上は俺がどうこう言うことじゃないしね。人の幸せ奪いたいわけでもないし。」

先輩は笑いながら、教科書や筆記用具などを鞆にしまっけてしまいました。

「じゃあ、俺行くから。これから卒研。」

ただ気まずいような感じだけがのこり、この日から一週間ほど、研究室に顔を出せませんでした。

そのまま時間だけが過ぎて、今に至るわけです。

考え込むようなことでもないんですけど、そういうことに限って考えてしまうのです。考えるといっても、どうしよう、の繰り返しで、反省でもなんでもありません。

自分で自分が情けない……。そんなことを思うのも、またどうでもいいことなわけで……。結局は悪循環。

そして今日もこんな考え事をしているうちにチャイムがなって、急に騒がしくなる教室の中、一人慌てるのでした。……授業、聞いてない。

「くだららと教科書などを鞆にしまっけて、講義室を出ようとすると、先生に呼び止められました。」

「古谷さん、ねえ、やっぱり元気無さそうですよ。風邪でもひいたんですか？」

「いいえ、大丈夫ですから。」

「本当に？ なんだか心配ですね。温かい紅茶でも入れてますから、部屋に来てください。おみやげのお菓子もいっぱいありますから。」

「食べ物にはつられませんよ。」

「そういう事じゃなくて。」

「行きたくありません。」

先生は少し驚いた顔をしました。それが申し訳なく感じて、井上先輩との一件を話しました。

話を聞いた先生は笑いだし、今度は私が驚いた顔をする番です。そんなに笑える話でしたか？

「井上が、そんなことを言っていたんですか？ つい先日は古谷さんがいないから変な感じで落ち着かないとか、一人で中島の相手をするのは体力がいるからつらいとか……、さんざん勝手なことを言っていたのに。」

「でも私は、先輩の邪魔をしてもいけないし、こんな事言われた後だから気まずいし……。我慢してたのに。意味ないじゃないですか。」

「そうみたいです。」

一瞬で目が覚めました。もうこうなったらいくらでも邪魔してやります。もちろん故意に邪魔するわけじゃありませんけど。私は私で学生生活を楽しもうと思います。先輩達の目の前であっても、かまわずに。

吹っ切れた私は以前と同じように、毎日、先生の部屋に行き、課題提出者のチェックを手伝ったり、部屋の掃除を手伝ったり、自分の課題をやったりしながら過ごしています。井上先輩は遊んでるって言いましたけど、結構やることもやってるんですよ。もちろん、先生に会いたいのがメインにかわりありませんが。

先輩達は真面目に卒研を始めたと言いつつ、相変わらずこの研究室は騒がしいままです。なんだかんだで落ち着くところに落ち着いてるんですね。

これでも私は先輩達を応援しているので……これからみんな

頑張りましょ。

## 15話：心

試薬類の混ざり合った独特のにおいが広がる実験室。カチカチと時計の音が響いています。

私の斜め前には、真剣な表情で微量のサンプルと格闘する中島先輩。

呼吸するのも忘れるほど、慎重な手つき。

しかし、私の方をチラリと見て盛大なため息を一つ。

「リンちゃん。暇なら帰れば？ 遅くまで無理して待つ必要ないじゃない。」

「そうですね。なんだか先輩、いっぱいいっぱいになってそうなので。いつでもお手伝いするつもりでスタンバイしてるんですけど。」

「お手伝いねえ……。」

中島先輩はそういいながら苦笑いを返してきました。  
すみません。私が悪うございました。

先日、卒業研究中間発表が行われたのですが、夏休みが終わる頃までやる気を喪失していた先輩は発表直前にやっと動き出すと言う結果になり、何とも進捗状況が芳しくなかったのです。そのため、先生らの反応はイマイチで厳しい指摘もチラホラあり、先輩は少々落ち込んでいたのです。また、やる気を失ってもらっては困ると、矢崎先生は心配していたのですが、さすがは中島先輩。負けてたまるかと気合い十分で再スタートしたのです。

そこで私はそんな先輩を助けるつもりでお手伝いをしたのです。さすがに実験のお手伝いは難しいだろうと思い、流しにたまった試験管を洗ったのですが……落下のため数本破損。けががなかった事は不幸中の幸いです。

中島先輩は無駄に仕事が増えた気がする、と嘆いていました。

先生は笑顔でさらりと、卒業できないかもしれませぬ、なんて

言ってきて。

これには私も危機感を覚えました。勉強がどうか卒研がどうか、明らかにそれ以前の問題です。センス無いかもしれません。進路変更するなら今のうちかなあ、なんて本気で考えましたよ。

でも、何事も簡単にあきらめてはいけません。

「大丈夫です。今度はきちんとしていますから。」

「本当に？」

「本当です。」

「でもいいや。今日はそんなに洗うものないし。このサンプルを分析かける間に終わるから。それで今日は終わり。」

「もう終わりですか？今日は早いですね。」

「金曜日だからね。今日あわてて仕込んで、土日に出てくるのはゴメンだし。分析の方はざきつちが出しといてくれるみたいだけど。」

「先生土曜日も来るんですか？」

「ざきつちはそれなりに忙しいのよ。」

最近では会議が続いてるみたいですし、時期的にも忙しいのでしょうか。先生が研究室を空ける時間も多くなった気がします。

「じゃ、これ、分析かけてくる。くれぐれも実験器具に触らないように。おとなしく研究室で待っていきましょう。」

中島先輩は、小学生を相手にするような口ぶりと言って、実験室を出て行ってしまいました。

反抗したくなる部分もあるにはあるのですが、ここは素直に従うことにしましょう。

静かな研究室では、一人でいても何の楽しみもありません。

暇つぶしに携帯電話を出してみても、メールと言えばメルマガが届いているくらいですし、ネットに繋いでみてもパソコンの方が見

やすいのにも思っただけで疲れるだけです、何となく画面を眺めるだけのようない方しかできません。

授業中に携帯をいじっている学生はたくさんいますが、あんなに熱心にメールやゲームをする集中力は、私からすれば羨ましいほどです。指も目もよく疲れないと本気で感心してしまうのです。普段からメールは面倒だと思っただけで、用事がない限りは自分から送ることもありません。かといって電話ならかける、と言うこともないのですが。

遠方の友達なら手紙よりはよっぽど便利なのかもしれませんが、普段顔を合わせる友達とメールばかりしているのもどうかと思ってしまうのです。

今時の若者はそういうものなのかもしれませんが、斯くいう私も若いはずなんですけどね。

さて、何もしないでも時間は等速で過ぎるわけで、気がつけば六時過ぎ。移動してきてから五分もたつてはいないのですが、急に時間がもつたような気がしてきてしまいました。

荷物を鞆にしまって部屋を出ると同時に、矢崎先生が会議から戻ってきました。

「帰るんですか？」

「明日、来ます。」

「土曜日ですよ？」

先生は私に曜日の感覚がないものと判断したらしく、笑いをこらえるような表情をうかべています。

「もちろん知ってますよ。学生は土日のために平日は我慢をするんです。」

「社会人になっても似たようなものだと思いますけどね。で、何でわざわざ土曜日に学校に来る必要があるんですか？ 課題でも出されましたか？」

「そんなんじゃないです。来たいから来るんです。先生が明日も来るって、中島先輩から聞いたんです。」

「いろいろあるんですよ。学生と違って忙しいんです。」

「学生だっているいろいろありますよ。暇じゃないんです。」

「古谷さんは暇な学生代表に見えるんですけど、気のせいでしたか。」

「失礼ですね。私には明日学校に来るといふ予定があるじゃですか。全くもって暇ではございません。」

「暇だから来るんでしょう?」

「まあ、そうなのですが……。」

結局どんな風に言ってみても、先生のペースに持って行かれて、私は負けてしまうのです。そんな私を見て笑う先生。なんて楽しそうなんでしょう。私はそれを見ながら、いつか見返してやると考えるのです。いつかそんな日がやってくればラッキーなくらいかもしれません。

「でも、古谷さんが来ると仕事がかどらないんですよ。」

「先生までそんな事言うんですか?」

「誰かに同じことを言われたんですか?」

「中島先輩に。私が手伝うとやること増えるって。ついさっき。」

「その件に関しては同感です。でも、中島とはまた別の意味で、ね。」

「どういう意味でしょうか?」

「帰るなら早いうちに帰りなさい。明日の午後からは、たぶんあいてます。」

聞き返すよりも先に、先生はそういつて部屋に入ってしまったいました。

「一時ぴつたりに来ますから!」

なんだか気分が良くなった私は、駆け足で学校を飛び出し駅に向かいました。

先生との約束はきちんと守ります。一時ぴったり、先生の部屋の前に立つて、ドアをノック。

「失礼します。」

ドアを開けてしばし沈黙。スーツ姿の見覚えのあるような無いような、とにかくこの学生では無い男性が先生とお話中だったので。引き返すべきか、引き返さないべきか悩んだあげく、何事もなかったかのようにドアを閉めて出ようとすると、先生が声をかけてくれました。

椅子を勧められて座ったものの、何となく気まずくてどうしていいのか判りません。

「さて、菊池。僕は見ての通り忙しいのでそろそろ帰ってもらえませんか？」

「僕を邪魔者だと言わんばかりの、棘のあるセリフですね。」

「さすが菊池。よくわかってるじゃないですか。」

先生は満面の笑みを浮かべていますが、その威圧感に私は圧倒されそうです。それなのにスーツの男性は全く動じる様子がありません。

「しかしですね、矢崎先生。僕だって真面目な話をしに来たのですよ？ 話の途中なんですから、せめて最後まで話をする時間を……。」

「無理です。」

「そこを何とか！」

先生は冷蔵庫を開け、自分と私の分の麦茶を入れました。出された麦茶を飲みながら男性の方を見ると、空のグラスを寂しそうについでいる姿が目に入りました。

「そんな大事な話をしに来るのなら前もって連絡すべきですよ。たまたま僕がいたから良かったものの。今日は土曜日ですよ。普段ならこんなとこに来ません。」

「判りました。帰ればいいんですよ？ 矢崎先生は真面目な後輩

よりもかわいい生徒をとるのですね。僕なんかよりデートの方が大切なんですね。」

私は麦茶を吹き出しそうになるのを必死でこらえました。そんな私を見て楽しそうな顔をする男性。いったいこの人は何者ですか？

「えーっと、あの……」

「申し遅れました。私、こういう者でございます。」

生まれて初めて頂いた名刺を見て、やっと思い出しました。菊池浩人さん、先生の大学の後輩の方です。

「夏のフォーラムでお会いしましたね。」

「そうだったっけ？」

菊池さんは全く記憶にないようです。お話をしたわけでもないの  
で覚えてもらっていないくて当然だと思っのですが。

「こんなにかわいい子に会って、覚えてないはずは無いんだけど。

こちらの研究生？」

「違います。まだ一年です。雑用係みたいなものです。」

「へえ。それは大変なことで。矢崎先生、優しそうに見えて人使い荒いでしょ？ 昔っから人を目で使うというか、有無を言わさない

雰囲気もあるし。僕も学生の頃、それはそれは苦労しましたよ。」

「何となく、わかるかもしれません。」

私が同意してみせると、菊池さんはさらに機嫌を良くしました。

一方の先生は満面の笑みを浮かべて言います。

「僕が人を使っているのではなく、君たちが、ご丁寧に、僕の気持ちを察して行動してくれているものと思っていましたよ？」

「はは……気遣いできない後輩で申し訳ありませんでした。」

菊池さんは無理に笑顔を作りながら急に立ち上がり、鞆を持って部屋を出ようとしました。これ以上居続けるのは無理だと判断したようです。しかし、ドアノブに手をかけたところで顔だけ振り向かせ、真剣な顔をしました。

「本当に、真面目に考えといてくださいよ。」

「はいはい。」

菊池さんの足音が聞こえなくなると、先生はお茶を一口飲み、盛大なため息をつきました。

「やっとな静かになった。」

「菊池さんって先生の大学の後輩ですよ。学生の頃から仲良かったんですか？」

「僕の二つ下で、研究室も違うんですけど、いつの間にかなつかれていた気がします。疑問があるとはっとけない質みたいで、よく質問しに研究室に来てましたから。何度か勉強も教えましたよ。特別理解力がある訳でもないけど、とにかく一生懸命でした。今は営業の仕事をしています。製品データなんか納得いくまで調べて、その上きちんと覚えてるみたいです。性に合ってるのかもしれないね。」

「大学出たら、研究とか商品開発とか、そういう仕事ばかりかと思っていました。」

「そんなこと無いですよ。進路なんて人それぞれですし、仕事の選り好みばかりしてられる時代じゃないですからね。でも、そういうイメージの中ここに来てたって事は、古谷さんはそういう進路を考えているわけですか？」

「とんでもない。正直なところ、全く考えていません。この学校を選んだのはただ家から通いやすかっただけです。高校の時に、文系よりは理系かなと思って適当に学科も選んでしまいました。前期のテストはぼろぼろだったし、まだ半年しか経ってませんが間違えたと思うこともかなりあります。」

「そんなものですよ。高校生のうちに進路を決めたとしても、実際に仕事をするのはその何年も後なんです。世間の流れとしてなんとなく大学に入った学生も少なからずいるはずですよ。」

「そういう先生は、どうやって進路決めたんですか？」

「僕は、化学が好きだっただけです。気が済むまで好きなことを勉強したいと思ったんです。今もまだ飽きていないし好きなことを続けたいと思ったのでこうやって研究者として大学にいるわけです。」

好きなことが仕事になるって言うのはとってもお得ですよ。毎日が楽しい。」

先生はとても楽しそうな顔で笑います。先生にとって、先生であると言うことは遊びが仕事になるようなもののようなものです。先生は会議や雑用に関してはめんどくさいなどと言うことはしばしばありますが、授業やテストなどはそんなこと全くありません。卒研の時とはとにかく楽しそうにしている、中島先輩や井上先輩と並んで学生のような顔をするこさえあります。

少し機嫌が良くなった先生は、なんだか難しい話を始めました。「どんな物質でも分解していけば何らかの元素の集まりです。その組み合わせによって、世の中のものには構成されている。有機物なんてわかりやすいと思いますが、基本的には、炭素、水素、酸素、窒素、リンなどの集まりです。これらの組み合わせの方法によって、物質の性質は様々です。例えば、メタノールは人にとって毒になり得ますが、そこにメチルが一つ追加されたエタノールはお酒として大量に消費されている。なんだか不思議でしょう？」

「はあ。」

すでについて行ける気がせず、とぼけた返事をしてしまいました。が、それでも先生は私にかまう様子はありません。

「僕たちは普段の生活において、多くは完成したもののばかりを見えています。でも、それを分解して考えると色々なものが見えてきます。もちろん、何でもかんでも原子に戻して考えるわけではありません。が、日々、様々な研究は進められているんです。もちろん、僕が全てを把握しているわけではありませんが、世界中の研究をあわせれば、世の中にわからないものなんて無い、と言う時代もそう遠くないかもしれません。脳の機能の解明なども行われていますよね？人体に関して研究をすることは大切だと思います。医療分野の研究は大切なことだと思います。だけど僕は、どうしても知りたくない事がある。それが何か、わかりますか？」

私は必死で考えるふりをしました。質問されたことはわかってい

るのですが、はじめから話がつかめていないので、何を考えていいのかすらわかっていないのです。

勝手に百面相している私に、先生は静かに言いました。

「心、です。」

「……「ココロ」？」

「心は実態を持ったものでは有りません。でも、少なくとも感情は実在する。自分で感じるだけでなく、表情や言葉として、実態を持つんです。つまりそれは、脳の働きの一つとして解明されるのです。何らかの物質の働きであることもわかる。どういう条件でどういう活動があつて、どのような状態になる。そんなことがわかるのです。それは寂しいことだと思いませんか？」

「何ですか？ わからないことがわかるって言うことはいいことなんじゃないですか？」

「でも、それを知ってしまったら、僕の心は僕のものでなくなる気がするんです。僕の感情は全て、僕を構成する物質の働きでしかないと思ってしまうたら、僕という存在はただの原子の集まりでしか無くなってしまうんです。」

先生はとても悲しそうな顔をしました。

「好きという気持ちまで、体内の物質の働きでしかないと思つたら、とても悲しくなりませんか？」

「先生の話、なんだか難しくてよくわかりません。たぶん、私には一理解できないと思います。わかりたくてもわからない事だと思えます。でも、私は生きてます。毎日泣いたり笑ったりしながら、楽しんだり苦しんだりしながら生きてます。恋もしてます。そんな難しいこと、知らなくなつてわからなくなつて生きていけるんです。だから先生も考えなくていいと思います。」

先生の思い詰めたような顔を見たくなくて、自分でも何が言いたいのかわかりませんでした。それでも必死に答えました。すると先生は、ありがとうと言って、いつもの、あの優しい笑みを返してくれました。

肩の力が抜けると同時に恥ずかしさがこみ上げてきました。顔が赤くなっているような気がします。

「先生、気分転換にドライブに行きましょう！」

「行き先は？」

「ありません。」

「ガソリン代はタダじゃないんですよ？」

「けちなこと言わないでください。何処か、気分がすっきりするよ  
うな場所に連れて行ってくださいよ。」

そういいながら乗り気じゃない先生を無理矢理立ち上がらせ、部  
屋から押しだし、学校を後にしました。

## 16話：変化の兆候

時間は絶えず変化します。でもそれを細かく区切っていくと、それは誤差とも言えるような微々たる時間の連なりでしかありません。その一つ一つは変化していないのに等しいほどの時間です。それらを組み合わせた時間は、結局、変化していません。

大学にいる間の時間の変化は最小限のものだと思っていました。時計の秒針は動き、朝が来て夜が来る。季節が変わる。大学にいるからこそ、そこで保証される時間があると思います。大学にいるそれは先生との関係。この空間にいる以上、それは変わらないものだ。と心の何処かで思いこんで安心していたのです。

でもそれは違っただけです。

先生の中では、もう、とっくに変わり始めていたのです。

変わらなかったのは私だけ。変化を拒んだのは私だけだったので。

吹く風は涼しさを増し、時には寒さを感じるようになりました。

季節が変わっても私の生活に大きな変化はありません。朝は目覚ましにたたき起こされ、駆け込み乗車をして何とか遅刻せずに大学へ行き、授業に出て、でも眠くてうとうととして。なんだかよくわからないうちに午前の授業が終わり、気づいたら午後の授業も終わり、私はすぐさま先生の研究室に駆けつけるのです。

今日もいつものように先生の部屋に向かったのですが、またしても見覚えのないスーツ姿の男性が先生と話し込んでいます。私には特別な用事があるわけではないので、真剣な話の邪魔をしてはいけないと思います。すぐに引き返そうとしました。しかし、その様子を

見ていた男性はドアを開け、不思議そうな顔をして「どうしたの？」  
と一言。

「あれ、井上先輩……ですか？」

「他に誰がいるの？」

久しぶりに見る井上先輩は、スーツをきつちりと着て髪をきちんと整え、なんだか別人のようでした。私は声をかけられるまで、先輩だとは全く気づかずになっていたのです。

私は少し顔に熱を感じながら、先生の部屋に入り極力平生を装って先輩が座っていた椅子の隣に腰掛けました。

「知らない人かと思っただ？」

「……そうです。」

「ひどいなあ。俺は今、就職活動をする真面目な学生なの。これでも結構苦労してるんだからね。」

「就職活動？　あまり先輩に会わないと思っただら、そういうことだったんですか。さすが先輩、行動に移すのが早いですね。」

「早くなんかないよ。世界的な不景気のせいで結構苦しい状態にあるんだから。学校にくる求人も少なくなるし、ある程度は自力で探さないといけないしね。それを思ったら早すぎるなんてことはないし。自分自身が失敗しないためにも説明会とか見学会とかがあれば積極的に参加すべきだとは思っし。でも交通費も馬鹿にならないんだよね。場合によっては一日に同じ方面の会社を何社も回って交通費節約してみるとか、計画も練らなきゃいけないし。家ではエントリーシート書いたり、ネットとかで情報収集してみたり、なんだかもういっぱいいっぱい。」

大学を卒業したら、それなりに仕事には就けるだろうと考えていた私は、井上先輩の話聞いて、少し不安になって来てしまいました。先輩のように成績が良く活発なタイプの人ですらこんなに苦労するのなら、勉強は人並み以下、その上履歴書や面接でもアピールできないであろう私の未来はどうなるのでしょうか。

「参考のために教えてください。私が就職するためには、今のうち

に何をすべきでしょうか。」

「資格を取るとか？ 筆記試験や面接のためには、文章を書く、話す能力を鍛えるとか。あとは常識を身につけること、とかかな。」  
「なるほど。」

ここは少し、真剣に将来について考えるべきかと思い悩んでいると、急に先生が笑い出しました。せつかく真面目な方向へ切り替わろうとしていた頭は、すぐに元の状態に戻ってきてしまいました。

「古谷さん、あなたにもっともっと大切なことを教えてあげましょうか？」

「はい。何でしょうか？」

「まずは進級して卒業することです。」

「リンちゃん、そんなにピンチなの？」

「はあ、まあ、どうですかね？」

現実つて、厳しいですね。

「あつ、そろそろ俺行きますね。就職指導の先生と約束があるので。」

部屋を出て行く井上先輩の姿が、いつもよりしつかりとしたものに見えて、余計に自分だけが取り残されたような気分になってしまいました。

不意にため息をついた私の前に、先生がお菓子の詰め合わせを差し出しました。以前菊池さんが来たときに置いていった手みやげのようです。私はその中からマドレーヌを一つ取り、無言で食べました。

「まだ思い詰めて考える必要は無いんじゃないですか？ それより、本当に、進級の方が大事ですよ。」

「そうかもしれないけど、中島先輩は毎日卒研頑張ってるし、井上先輩は就活で必死だし。そうやって、いかにも目標に向かって努力してるっていう人たちを見ると、自分だけが取り残されているような気がするんです。」

「彼らはそういう時期なんだからしょうがないでしょう。」

「そうかもしれませんが。」

「じゃあ、目標を作りましょう。ちゃんと進級すること。決定ですね。」

「それは目標とか言う以前の問題じゃないですか。」

「でもそれが危ないんだから。勉強頑張って進級して、僕を安心させてください。」

そんな風に言われると、嫌とは言えなくなるじゃないですか。進級は当たり前のことだとは思いますが、それが私にとっては大きな壁であるのも事実です。頑張って勉強して、単位を取って、それが先生のためにもなるのであれば、私は本気でやりましょう。とても単純な思考回路ですが、先生のためと思うと何でもできる気がします。

「頑張ります。」

「それじゃ、最初にあさって提出のレポートに取りかかることをおすすめします。」

半ば忘れかけていた先生の授業の課題。私が全くやっていないことを先生は見抜いていたんですね。

「それでは、今日は帰って課題をこなすことにします。」

「気合い十分ですね。期待してますよ。」

「まかせてください。」

恋する乙女、古谷鈴音。今日からは真面目な学生になります。

翌日、私はいつものように先生の部屋に転がり込んでいました。

真面目な私はほんの数時間しか持続力を持たなかったのです。

「先生、やっぱり無理です。机に向かう時間は、やはり限界というものが存在します。」

「それはそうでしょう。二十四時間机に向かうなんて不可能ですし。」

そもそも無理して勉強する必要なんて無いんですよ。やるべきことをきちんとこなす。これだけと思うかもしれませんが、それこそが真面目な学生の姿だと思うのですがね。」

「それを言うなら先生、私はきちんと課題はこなしていますし、真面目な学生じゃないですか。」

「やるべきことは課題だけではないでしょう？ それより小テストの方が実際のウエイトも大きいんじゃないですか？」

「おっしゃるとおりです。でも、頑張ってもどうしようも無いことはあるのです。テストが難しすぎるとか、先生が意地悪だとか。」

「だからだろといいわけを並べようとする私に、先生は真剣な眼差しで言いました。」

「結果を出しなさい。」

それができたら苦労しませんよ。心の中ではそういつてみたものの、先生の瞳の温度が下がるのを感じた私は、その言葉をぐいと飲み込みました。

「学生のうちに得るものとして、過程は大切なものです。ですが、社会に出て求められるのは常に結果でしかないので。どんなに頑張っても努力をしても、結果が出なければそれは何の意味も持たないのです。形だけ真面目なふりをして結果が出ないのであれば同じことです。古谷さんは勉強に関しては不真面目です。だけど、人としては真面目だと、少なくとも僕は信じています。」

「意味がよくわかりません。」

「とにかく結果を出せばいいだけのことです。」

「結果、結果という意味がわかりません！」

私は不意に声を荒げて言い返していました。それでも、先生の冷たい眼差しに動じる様子は全くありません。

「先生はいつも難しい話ばかりですね。私には全く理解できません。言いたいことがあるならばつきりとわかるように言ってください。」

「わからないのはあなたが子供だからです。努力を形にしなさい。それだけです。」

「もういいです。結果でも何でも出せばいいんですね！」  
先生の煮え切らない様子にどんどん腹が立ってきて、私は研究室を飛び出しました。

それから私は、少しだけ努力をしました。

腹が立つのと悔しいのと、なんだかよくわからない感情に押され、先生になんか頼らないと思いつながら過ごしました。その結果、研究室にもほとんど顔を出さなくなりました。課題や小テストは極力自力でやろうと思いましたが、わからなければ調べる、考える。自分では解決できないときは納得いくまで教えてもらう。いままでぼろぼろで、相性が悪いと思いついてきた先生の小テストで点数がぐんと上がったとき、自分の努力した時間に充実を感じました。

今までの私は、きっと先生に甘えすぎていたのです。わからなくてもつまずいても、先生が助けてくれるとそればかり思っていたのです。

それなのに今は、先生がいなくても大丈夫、そんな強気さえ生まれてきたのです。

## 17話：不安

日に日に寒さが増してゆく季節。気がつけば街はクリスマスに向かつて猛スピードで進んでいきます。

つまり、クリスマス、大晦日、お正月、お年玉……年間行事の贅沢な部分をこれでもかと詰め込んだ冬休みが近づいているということです。

去年までは、中学校や高校の友達とクリスマスパーティーをしたり、年越しで初詣に行ったりしていました。でも、行く先々で見かけるカップルを少し羨ましく思う気持ちがつきまとっていたものです。クラスの友達に彼氏が出来ればそれを話のネタに、全力ではしゃいでいた時代ですから。

そうは言いつつ、本心は一人でかなりはしゃいでいるのですが、もう数週間も先生と連絡を取っていないので、複雑な心境ではあります。

結果を出さない、という先生の言葉に腹を立ててやけになっていた私は、確かに勉強では結果を出しつつあるのですが、変わりに先生との時間を一切作らなくなりました。

あの時部屋を飛び出したせいで気まずさはかなりのもの。それに加え、先生からの連絡は一切無いので、本当は私のことなんてどうでもいいんじゃないか、なんて考えで頭がいっぱい。本当は寂しくも悲しくもあるのです。

だからといって、先生の本心を聞くのはもっと怖いのです。

はあ、と盛大なため息を一つ。ため息をつくとき幸せが逃げるなんて言いますが、そうでもしないとやってられないときもあるんです。数十分前に開いた本のページは未だめくられないまま放置状態。

「クリスマス、クリスマス……。」

もはや呪いの呪文と化したその言葉を繰り返しつつやいていました。

次の日、学食で席を探していると春恵先輩を見つけました。今日は一人のようです。

「あつ古谷じゃん。久しぶりー。席あいてるから座りなよ。」

「ありがとうございます。珍しいですね。一人で学食なんて。」

「そうなの。学校のすぐ近くにパン屋がオープンして、みんなそっちに行っちゃった。残念ながら昨日の買い物で財布の中身空っぽなの。帰りにお金おろさないと生きていけないわ。」

「大金使っちゃったってことですか？」

「元々手持ちが少なかつたんだけどさ。幼なじみ達と久々に遊んだら調子のっちゃって。」

「しつかり者の先輩にしては珍しいですね。」

「私だって人間なんだから失敗もするに決まってるでしょ？あ、そうそう、それよりこれ見てよ。」

春恵先輩は鞆の中からパンフレットを数枚取り出して、テーブルの上に並べました。どれもこれも、クリスマスムード一色。おもしろいなケーキのパンフレットでした。

「ほら、もうすぐクリスマスじゃん？ 中島君と二人でクリスマスパーティーしようと思ってるの。せっかくだからケーキくらい贅沢してもいいかなーって。料理はあたしができるんだけどね。もちろん、古谷もデートでしょ？」

「いいえ、全く……そのような予定はございません。」

「なんで!？」

そんなに驚かなくても、と思うのは私だけでしょうか。

「クリスマスにはね、世の中のカップルはみんな一緒にいなければいけない決まりなの。」

「そんなの聞いたことないですよ。」

「だって私の考えたもの。でも、今聞いたでしょ。」

それはあまりにも強引ですよ。

「先輩の考えはわからなくもないですが……。学生には可能でも、社会人には不可能じゃないですか。クリスマスって、祝日でもなんでもないんですよ？」

「わかってないなー、古谷は。バレンタインも、ホワイトデーも休日じゃないよ？誕生日だってそう。だけど恋する乙女にとっては何よりも特別な日じゃない。今だって、ちょっとは気にしてるんですよ？それが証拠。古谷にとっても特別な日のはずよ。それに、今年の25日は土曜日だしね。関係ないでしょ？24日に矢崎の仕事が終わったならディナーに行って、それからお泊まりデートってのもよくない？」

「お泊まりデート……ですか。」

「ん？ やらしいこと考えちゃった？」

「っ！？ そんなんじゃないです！ そんなじゃなくて、その……何にも考えられないっていうのが正しいかもしれませぬ。」

「うまくいってないってこと？」

私は肯定するでも否定するでもなく、先輩から視線をそらしました。

ぼつぼつと、自分の中の不安……先生とけんかするように研究室を飛び出してから、ほとんど会っていないことを話しました。

話し出したらどんどん不安が大きくなって、自分の中で何が原因で何が不満なのか、そういうものがどんどんわからなくなってきたしまいました。

それでも春恵先輩は心配そうな顔をして、真剣にうなずいて聞いていてくれました。

「やっぱり、私じゃ駄目だったんですね。」

「その結論はまだ早いよ。少なくとも、私たちから見て、矢崎が遊んでるようには見えなかったし。不安になることもあるだろうけど、自信持ちなよ。中島君が、最近の矢崎はちょっと元気がないみたいなこと言ってたし。学年末が近づいて卒研が追い込みの時期つてもあるし、とにかく忙しいみたい。だからと言ってもいいのかわか

んないけど、これは先輩命令！ お互い気分転換すると思つて、とにかくクリスマスは一緒にいなさい！ わかつた？」

突然口調が強くなつた先輩に啞然とする私をみて、今度は先輩がきよとんとした顔をしました。そのやりとりがなんだかおかしくて急に笑いがこみ上げてきました。

「やつといつもの古谷になつた。不安になることは多々ありますとも。それを乗り切れなきや偽物だつて。それに、悩みすぎるとハゲるよ？」

「そうですね。拒否されたわけでもないんだから、落ち込んでみましょうがないですね。」

「人生、常に直球勝負！」

いつも前向きな春恵先輩をちよつぱり羨ましく思います。こんな風に自分に素直に、なんでもすぐに行動できたらどんなに楽だろう。でも、自分の中の不安をぐるぐる循環させていてもしょうがないので、ここは春恵先輩のパワーをもらったことですし、勇気を出して先生と連絡を取ってみようと決意しました。

あれから数日後、先生の授業が終わるとすぐに荷物を片付け、質問があると嘘をついて、放課後に研究室に行く約束を取り付けました。正直、自然な態度で先生に声をかけることを意識してばかりで、授業中も話なんて右から左状態です。質問できる箇所なんてありません。

それでも何とかそれらしい話ができるようにコミュニケーションし、放課後、研究室へと向かいました。

しかしながらそんな芝居は全く意味がなかったようで、私が部屋に入るなり、先生は不機嫌そうな視線を向けてきました。

「質問なんて無いんでしょう？ いったい何のようですか？」

「え？ そんなことないですよ。えーっと、このページの……」

「授業聞いてないのにわかるわけないでしょう？」

「ばれてましたか。」

焦る私に、先生の顔がほころぶのがわかりました。

「ええ、あまりにもわかりやすすぎて面白かったですけどね。最近はどうしても真面目に授業も聞かし、テストの点数も上がって感心していたのに。明らかに今日は挙動不審というか……。手も動いていませんでしたからね。」

そんなにもあからさまな行動をとっていたのかと思うと、急に数時間前のことが恥ずかしくなり、赤面してしまいました。先生はそんな私を特に気にもとめず、いつものように余裕の笑みを浮かべていました。

「それで、本題は何でしょうか？」

「えー、あの、その……。」

なんではつきり言えないんだろう。まるで告白するときのように、妙な緊張が襲いかかってきました。

微妙な間がとて長く感じ、でも、なかなか言葉が出なくて、脳内がどんどんぐちゃぐちゃ散らかっていきます。それでもなんとか泣きそうな気分でやっとぼつりと単語をを発しました。

「……クリスマス、24日……。」

「クリスマス？ ああ、中島に何か言われたんですか？」

「中島先輩？」

「違うんですか？ 僕は何故か説教くらいましたよ。クリスマスに彼女をほったらかしにする馬鹿な男はこの世に存在してはいけないとか何とか。相当意味不明でしたけどね。卒研のせいで常々僕の貴重な休日を削っておいて、自分のことを棚に上げるにもほどがある。」

「そうでしたか。私は春恵先輩に説教されて。」

「二人してそういう考えな訳ですね。学生って気楽でいいですよ。で、古谷さんはそのクリスマスのお誘いに来てくれた、と。そういうことですね？」

「ええ、まあ。」

私が苦笑いを返すと、先生は困ったなあと言って手帳を開きました。

「その日はどうしてもはずせない用があるんです。冬休みも休みじゃないし……。年始かなあ。3日、1月3日はどうですか？」

「クリスマスじゃないです。」

「クリスマスじゃなきゃ駄目ですか？ 行きたい場所に希望があるとか？」

「そんなんじゃないですけど。」

もしかすると本当に先生は私のことなどどうでもいいんじゃないかと思えて、悲しい気分になりました。それは先生にも少し伝わっていたようです。

「すみません。特別な日を大切にしたい気持ちはわからないことでもないですよ。でも、こちらにも都合があることもわかってもらえますよね？ 3日なら本当に大丈夫ですから。朝イチで遠出して、知っている人が誰もいないところへ行つて、いつもの現実から離れて少し違う気分を楽しみましょう。その日までにきちんとプランは立てておきます。古谷さんの希望があれば何でも言いつけてください。そんなんじゃない駄目ですか？」

私は首を横に振りました。

「じゃあ、いらぬ気を遣わなくていいように、それまで真面目な学生でいてくださいね。課題をため込むのは禁止です。」

今度は首を縦に振りました。

「物わかりがいい学生で助かります。こんな学生ばかりなら苦労しないんですけどね。」

そういいながら先生が手元の小テストに手を伸ばし、採点作業を始めたので、私は一礼して研究室を後にしました。

クリスマスではなかったけど、デートの約束をすることは出来ませんでした。それなのに、なんだか腑に落ちないもやもやした気分が残っ

ていました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7725b/>

---

for You to You

2011年8月28日16時26分発行